

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第69集

遺跡詳細分布調査報告書

第 13 集

住宅開発関係の確認調査

大規模開発関係の確認調査

台ノ上遺跡の緊急調査

脇之沢遺跡の確認調査

古志田東遺跡の確認調査

2000

米沢市教育委員会

遺跡詳細分布調査報告書

第 13 集

住宅開発関係の確認調査
大規模開発関係の確認調査
台ノ上遺跡の緊急調査
脇之沢遺跡の確認調査
古志田東遺跡の確認調査

2000

米沢市教育委員会

序 文

本報告書は、米沢市教育委員会が平成11年度に、国庫補助事業として実施した「遺跡詳細分布調査」の成果をまとめたものです。

本市教育委員会は、埋蔵文化財の周知を図るために、遺跡詳細分布調査を13年間継続して実施しております。調査を重ねることは、埋蔵文化財の所在、範囲、年代等の解明につながり、新規の遺跡を発見してきました。

今年度の遺跡詳細分布調査では、開発行為に係わる緊急発掘調査及び確認調査を4件実施しました。前者としては台ノ上遺跡があります。小範囲にもかかわらず多量の遺物が出土し、あらためて本遺跡の特異性を再確認した次第です。もう1箇所は大樽遺跡です。下水道工事に関連して実施しました。

確認調査としては、横山古墳、脇之沢遺跡があります。横山古墳は、八幡原ヘリポートの所在する北方500mの通称「寺山」と称される尾根の頂上付近にあり、調査の結果、県内最古級の古墳のひとつであることが明らかになりました。このことから横山古墳は別冊として報告します。

脇之沢遺跡は林道工事によって発見された遺跡で、サンマリーナ玉庭の手前に位置し、山の奥深いところにあります。遺物の多くは石器を製作するときに出る剥片であり、多量に出土しました。周辺に石器の原石もあることから、石器石材供給地ではないかと考えております。

このように、今年も事業を継続することにより、成果を上げることができましたことは関係各位のご理解とご協力を得た結果と感謝申し上げます。今後も開発事業と円滑な調整を図り、可能な限り力を注いでいく所存です。

最後になりましたが、調査に際しご指導を賜りました文化庁、山形県教育庁文化財課をはじめ、地権者各位、地元の皆様に対し、心から御礼申し上げます。

平成12年3月

米沢市教育委員会

教育長 佐藤政一

例　　言

- 1 本報告書は、文化庁の補助を受けて実施した、平成11年度の米沢市埋蔵文化財発掘調査報告書 第69集である。
- 2 調査は米沢市教育委員会が実施した。
- 3 調査体制は下記のとおりである。

調査主体 米沢市教育委員会

調査総括 小杉 基（文化課長）

調査担当 手塚 孝（文化課文化財係主任）

調査主任 菊地 政信 月山 隆弘（文化課文化財係主任）

調査補助員 黒澤 富雄 長澤 由紀

調査参加者 安部慶夫 石川 八重子 伊藤 博美 梅津 智恵子

遠藤 富男 木口 敏也 黒田 よし子 小嶋 鍛

近野 康子 今野 周藏 佐藤 義一 佐藤 四郎

佐藤 秀子 清水 弘文 鈴木 信雄 高橋 信子

高橋 洋三 武田 房次郎 戸田 和子 西野 勇二

新田 弘二 森 寿信 薬科 昭四郎

事務局長 小林 伸一（文化課長補佐）

事務局 岡本 信彦（文化課文化財係長） 渡辺 紘子（文化課文化財係主査）

- 4 報告書執筆の基準は次のとおりである。

- (1) 挿図の縮尺は、第Ⅰ節の宅地関係は5,000分の1、大規模開発が10,000分の1であり、他は各挿図にスケールで示した。図版の縮尺は適宜行っている。
- (2) 挿図内の遺構記号は、B Y-建物跡、T Y-柱跡、P Y-ビット、D Y-土壙、K Y-堀・溝跡、遺物記号は、A Z-土器、B Z-石器、M Y-埋葬土器、を示す。
- (3) 挿図の方針は真北を示し、方位がないものについては磁北を示す。

- 5 各遺跡の出土遺物は、米沢市埋蔵文化財資料室に一括保管している。

- 6 本書の作成は菊地政信、月山隆弘が行い、全体については手塚 孝が総括した。

- 7 調査にあたって、薬科昭四郎氏、山岸久悦各氏、及び財米沢市開発公社の関係各位の協力を得た。記して感謝申し上げます。

本文目次

第Ⅰ節 住宅開発に伴う埋蔵文化財調査経過

1 住宅開発に伴う遺跡の確認	1
2 大規模開発に伴う試掘調査の確認	1

第Ⅱ節 台ノ上遺跡

1 遺跡の概要	18
2 調査の経過	18
3 検出遺構	18
4 検出遺物	20
5 まとめ	22

第Ⅲ節 脇之沢遺跡

1 遺跡の概要	31
2 調査の経過	31
3 検出遺構	32
4 出土遺物	33
5 まとめ	34

第Ⅳ節 古志田東遺跡

1 遺跡の概要	43
2 調査経過	43
3 検出遺構	43
4 まとめ	45

表-1	2
表-2	3

参考文献	48
報告書抄録	49

挿図目次

第1図	古志田館ノ内A遺跡	4
第2図	井戸尻館跡	4
第3図	荒川遺跡	4
第4図	台ノ上遺跡	5
第5図	八幡堂遺跡	5
第6図	大樽遺跡	5
第7図	米沢城跡・米沢城東二の丸跡	6
第8図	元立遺跡	7
第9図	城西一丁目遺跡	7
第10図	下原b遺跡	7
第11図	館山平城跡	8
第12図	台坂遺跡	8
第13図	下花沢b遺跡	9
第14図	花沢b遺跡	9
第15図	上浅川a・b遺跡	9
第16図	中谷a遺跡	10
第17図	赤崩c遺跡	10
第18図	大壇A遺跡	10
第19図	東屋敷遺跡	11
第20図	牛森遺跡	11
第21図	笠野館ノ内館a跡	11
第22図	成島遺跡	12
第23図	大浦c遺跡	12
第24図	分布調査区範囲位置図(1)	13
第25図	分布調査区範囲位置図(2)	14
第26図	分布調査区範囲位置図(3)	15
第27図	分布調査区範囲位置図(4)	16
第28図	分布調査区範囲位置図(5)	17
第29図	台ノ上遺跡位置図	23
第30図	台ノ上遺跡第6次調査区遺構全体図(1)	24
第31図	台ノ上遺跡第6次調査区HY14平面図(2)	25
第32図	台ノ上遺跡第6次調査区HY3・DY9・18・19平面図(3)	26
第33図	台ノ上遺跡第6次調査区HY3・DY9・18・19平面図(4)	27

第34図	台ノ上遺跡第6次調査区D Y12・13・16平面図(5)	28
第35図	台ノ上遺跡第6次調査区出土遺物実測図(6)	29
第36図	台ノ上遺跡第6次調査区出土遺物実測図(7)	30
第37図	脇之沢遺跡位置図	35
第38図	脇之沢遺跡Aトレンチ平面図(1)	36
第39図	脇之沢遺跡B・Fトレンチ平面図(2)	37
第40図	脇之沢遺跡Cトレンチ平面図(3)	38
第41図	脇之沢遺跡D・Eトレンチ平面図(4)	39
第42図	脇之沢遺跡出土土器拓影図	40
第43図	脇之沢遺跡出土土器実測図(1)	41
第44図	脇之沢遺跡出土土器実測図(2)	42
第45図	古志田東遺跡調査区位置図	44
第46図	B調査区遺構全体図	46
第47図	C調査区遺構全体図	47

図版目次

図版1	台ノ上遺跡第6次調査	図版11	台ノ上遺跡第6次調査
図版2	台ノ上遺跡第6次調査	図版12	脇之沢遺跡の調査
図版3	台ノ上遺跡第6次調査	図版13	脇之沢遺跡の調査
図版4	台ノ上遺跡第6次調査	図版14	脇之沢遺跡の調査
図版5	台ノ上遺跡第6次調査	図版15	脇之沢遺跡の調査
図版6	台ノ上遺跡第6次調査	図版16	脇之沢遺跡の調査
図版7	台ノ上遺跡第6次調査	図版17	脇之沢遺跡の調査
図版8	台ノ上遺跡第6次調査	図版18	脇之沢遺跡の調査
図版9	台ノ上遺跡第6次調査	図版19	古志田東遺跡の調査
図版10	台ノ上遺跡第6次調査		

第Ⅰ節 住宅開発等に伴う埋蔵文化財調査経過

1. 住宅開発等に伴う遺跡の確認

本年度、本市教育委員会に住宅開発等によって、埋蔵文化財に係りがあると判断されるため、協議や分布調査等の確認依頼を受けたのは、平成12年3月13日現在で94件であった。これらの内で、遺跡包蔵地及び包蔵地外を含め、実際に重機等を使用して試掘調査を実施した内訳は下記のとおりである。

1 個人住宅建設に係るもの	28件	2 建設に係るもの	12件
3 工場・倉庫等に係るもの	3件	4 砂利採集に係るもの	5件
5 土地開発等に係るもの	7件	6 公共施設等に係るもの	5件
7 その他の開発に係るもの	5件		

以上のように、今年度の調査依頼の種類は例年同様、個人の住宅建設に係るものがその多くを占めており、次いで大規模な土地開発及び砂利採集等に係るものがある。上記の試掘の概要はその調査箇所位置図（第1～23図）と表-1に調査箇所、調査月日、開発の種別、調査方法等をまとめてるので参照されたい。

今年度の分布調査によって、遺跡の遺存が確認され発掘調査に至った箇所は台ノ上遺跡があり、第Ⅱ節で詳しく述べる。

昨年度の分布調査によって遺構、遺物等が確認されたため、新規遺跡として登録され発掘調査を実施した「古志田東遺跡（平安時代）」がある。当遺跡の発掘調査の進行中、遺構が予想以上に広がっている可能性の指摘、指導を受けたことから、開発者と再度協議を行い、遺跡範囲と遺構をより詳細に把握するための再度試掘調査（トレンチ調査）を実施した。その結果、遺跡範囲が東側及び南側にも残存することが判明したことにより、これらの箇所について再確認調査を実施したものである。この報告は、本文の第Ⅳ節に記述する。当遺跡の頭初の発掘調査は、原因者及び当市の負担で実施したことから、報告書は遺物整理後、平成12年度に刊行する予定である。

2 大規模開発に伴う試掘調査の確認

当市教委では、1,000m²以上の各開発を大規模開発の目安としており、遺跡の包蔵地外における場合において、遺跡包蔵地を密に把握するため開発者に分布調査依頼を提出していただき、試掘調査の協力を得ている。

今回の大規模開発に係る調査依頼は、平成12年3月13日現在で22件あった。近年の大規模開発の傾向は、郊外における大型店舗等の造成が多くみられたが、今年度の傾向は宅地造成や集合住宅及び砂利採取等の開発が増加傾向を示している。これらの大規模開発に係る試掘調査の概要はその調査区位置図（第24～28図）と表-2にまとめている。今回の分布調査において、遺跡包蔵地と確認された箇所はないが、昨年度の古志田東遺跡のように、新規の遺跡が発見されることが想定されることを念頭におき、来年度も引き続き分布調査実施したい。

表-1 平成11年試掘調査表

NO	遺跡名	調査箇所	調査月日	種別	調査方法	備考
1	古志田館ノ内A	古志田町字熊野前2840他	4月5日	住宅	グリット	4m×4m 1箇所
2	井戸尻館	下小菅1903他	4月5日	資材置場	トレンチ	1m×5m 10本
3	荒川	塙井町塙野字四丁目786-2他	4月9日	住宅	グリット	4m×4m 2箇所
4	台ノ上	吾妻町62-16他	4月23日	住宅	トレンチ	2m×4m 2本
5	米沢城	丸の内1丁目10-1	5月19日	住宅	トレンチ	2m×8m 1本
6	八幡堂	万世町堂森451-4他	5月6日	住宅	トレンチ	1m×8m 1本
7	大樽	館山4丁目6456	5月7日	住宅	トレンチ	2m×4m 1本
8	元立	大字川井字元立1999-1他	5月20日	住宅	トレンチ	2m×4m 1本
9	米沢城・ 米沢城東二の丸	城南1丁目1-20	5月19日	住宅	トレンチ	2m×6m 1本
10	城西1丁目	城西1丁目119-17、119-18	6月8日	住宅	トレンチ	2m×8m 1本
11	下原b	通町2丁目16554-43	6月9日	共同住宅	グリット	2m×2m 1箇所
12	館山平城	館山4丁目3-5	6月14日	道路	トレンチ	6m×49m 1本
13	米沢城	丸の内1丁目3099-11	6月24日	住宅	グリット	2m×2m 1箇所
14	台坂	花沢3丁目1855-6	7月2日	住宅	グリット	2m×2m 3箇所
15	下花沢b	万世町片子321	7月8日	宅地造成	トレンチ	2m×4m 1本
16	上浅川A・B	大字浅川地内	7月22日	道路拡幅	トレンチ	12m×340m 1本
17	館山平城	館山3丁目地内	8月2日	下水道	トレンチ	1m×50m 1本立会い調査
18	館山平城	吹屋敷809-3	8月2日	住宅	トレンチ	2m×1m 2本
19	大樽	館山5丁目6517、6517-3	8月2日	住宅	トレンチ	2m×6m 1本
20	花沢b	駅前4丁目2320-3	8月26日	住宅	トレンチ	4m×2m 1本
21	米沢城東二の丸	門東町3028-16他	8月26日	店舗	トレンチ	1m×6m 2本
22	中谷地a	大字竹井字荒屋1523-1他	9月7日	住宅	トレンチ	1m×5m 2本
23	花沢b	下花沢2丁目5-77	9月10日	住宅	トレンチ	1.5m×5m 2本
24	台坂	下花沢3丁目1771-1	9月13日	住宅	トレンチ	1m×5m 2本
25	米沢城	松が岬2丁目4736-7	9月17日	倉庫	トレンチ	1m×10m 2本
26	赤崩c	大字赤崩観音下20486-2他	9月28日	工場	トレンチ	1m×10m 2本
27	大壇A	大字塙野3785	10月4日	住宅	トレンチ	1m×4m 2本
28	台坂	下花沢3丁目1455-1	10月14日	住宅	トレンチ	1m×4m 2本
29	米沢城東二の丸	城南1丁目98-21	10月14日	住宅	トレンチ	1m×1m 4箇所
30	台坂	下花沢2丁目1840-2	10月20日	住宅	グリット	0.5m×8m 4本
31	東屋敷	大字竹井字三保903-1他	11月10日	住宅	トレンチ	1m×4m 4本
32	大浦c	中田町492-1他	11月12日	店舗	トレンチ	1m×6m 4本

NO	遺跡名	調査箇所	調査月日	種別	調査方法	備考
33	米沢城東二の丸	城南1丁目5-14	11月26日	住宅	トレンチ	1m×15m 2本
34	牛森	万世町牛森字下原屋敷4152-57	11月30日	住宅	グリット	1m×8m 2本
35	米沢城東二の丸	門東町2丁目3006-1他	12月14日	住宅	グリット	1m×4m 4本
36	館山平城	館山町5丁目6441-2他	12月14日	住宅	トレンチ	1m×8m 2本
37	篠野館内館a	篠野本町字間口山6785-1他	12月24日	住宅	トレンチ	2m×6m 2本
38	元立	大字川井字元立2079他	12月22日	住宅	トレンチ	1m×4m 2本
39	成島	広幡町成島字窪平2107-93他	1月9日・ 2月8日	下水道	トレンチ	1m×8m 2本
40	米沢城	丸の内1丁目15	2月2日	公園造成	立会い	75cm×0.6m 1本
41	大浦c	中田町字若宮491-1他	2月2日	廣告塔	グリット	1m×1m 4箇所
42	館山平城	館山5丁目	3月9日	住宅	トレンチ	1m×8m 2本
43	下花沢b	東大通3丁目	3月13日	住宅	トレンチ	1m×8m 2本

表-2 大規模開発

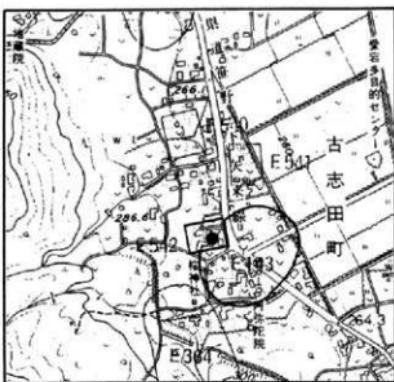
NO	遺跡名	調査箇所	調査月日	種別	調査方法	備考
1	古志田東	古志田町365他	5月12～ 5月14日	宅地	トレンチ	2m×90m 他13本
2	該当なし	大字李山字横堀道東地内	5月24日	砂利採取	トレンチ	2m×8m 1本
3	該当なし	林泉寺2丁目2159-31他	6月15日	店舗	トレンチ	2m×12m 1本
4	該当なし	大字下新田字袖他内	8月26日	破砕事業	グリット	4m×4m 4箇所
5	該当なし	塙井町塙野地内	10月5日	砂利採取	トレンチ	2m×80m 2本
6	該当なし	広幡町小山田地内	10月6日	砂利採取	トレンチ	2m×150m 2本
7	該当なし	徳町30-2他	10月12日	建売分譲業	グリット	1m×1m 6箇所
8	該当なし	花沢町2710-1他	10月14日	店舗造成	グリット	1m×1m 12箇所
9	該当なし	成島町地内	11月1日	駐車場張	トレンチ	2m×4m 8箇所
10	該当なし	徳町30-2他	11月10日	店舗増築	トレンチ	2m×50m 他2本
11	該当なし	徳町2173-3他	11月10日	宅地分譲	トレンチ	2m×30m 他2本
12	該当なし	六郷町桐原62-1他	11月16日	砂利採取	トレンチ	2m×80m 2本
13	該当なし	大字浅川～大字長手地内	11月1～2・25日 12月1日	道路	トレンチ	4m×180m 他5本
14	該当なし	御廟2丁目216他	11月30日	貸店舗 造成工事	トレンチ	1m×50m 2本
15	該当なし	六郷町長橋地内	12月7日	砂利採取	トレンチ	2m×120m 2本
16	該当なし	大字三沢字白旗拾入1213地内	12月24日	建売分譲地	トレンチ	2m×50m 他2本
17	館山平城跡	館山1丁目地内	12月28日	住宅団地	トレンチ	2m×30m 3本
18	該当なし	中央7丁目15-1	1月14日	宅地造成	トレンチ	2m×15m 2本
19	該当なし	篠野字宇津沢5地内	1月26日	宅地	トレンチ	2m×70m 2本

2 試掘調査状況

(1) 古志田館ノ内A跡

本遺跡は、古志田町字熊野前の斜平丘陵直下の標高266mに所在する。遺跡は中世期に属するものであり、隣接して南東側には縄文時代の桜神社遺跡、古志田遺跡、北側には古志田館ノ内B、大在家館跡等が存在する。

今回の申請は、個人の住宅の新築に伴うものである。 $4\text{ m} \times 4\text{ m}$ のグリットを設定し調査した結果、遺構、遺物は検出されなかった。念のため慎重工事を指示した。



第1図 古志田館ノ内A遺跡

(2) 井戸尻館跡

本遺跡は、下小昔の成島丘陵直下の標高232mに所在する。遺跡は中世期に属するものである。北側に隣接して縄文、平安時代の下小昔遺跡、西側丘陵裾部には、平成5年度に発掘調査を実施した奈良、平安時代の大神窟跡等が存在する。

今回の申請は、資材置場に伴うものであり、 $1\text{ m} \times 5\text{ m}$ のトレンチを10本設定し調査した結果、遺構、遺物は検出されなかった。念のため慎重工事を指示した。

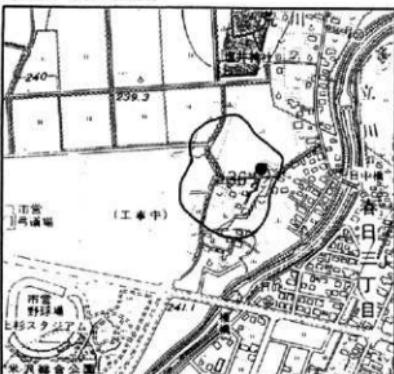


第2図 井戸尻館跡

(3) 荒川遺跡

本遺跡は、荒川の塩井字塩井四丁目の水田地帯、標高240mに所在する。遺跡は縄文、平安時代に属するものである。北側には、縄文から平安時代までの荒川2遺跡が存在する。

今回の申請は、個人の住宅の新築に伴うものであり、 $4\text{ m} \times 4\text{ m}$ のグリットを2箇所設定し調査した結果、遺構、遺物は検出されなかった。慎重工事を指示した。



第3図 荒川遺跡

(4) 台ノ上遺跡

本遺跡は、吾妻町の住宅街の標高263mに所在する。最上川（松川）の自然堤防状に立地し、近年宅地化がめざましく進んでいる所である。遺跡は縄文時代中期に属している。

申請は、個人の住宅の新築に伴うものである。2m×4mのトレンチを2箇所設定し調査した結果、表土下約40cmで土壙や、土器片が検出したことから、今年度緊急発掘調査を実施した遺跡であり、第Ⅱ節で詳しく述べる。

(5) 八幡堂遺跡

本遺跡は、万世町堂森の標高260mに所在し、縄文（前期・後期・晩期）、古墳時代に属する。隣接して東及び西側には、縄文時代の二タ俣a、前野、金谷a遺跡等が多数存在する所である。

今回の申請は、個人の住宅の新築に伴うものである。1m×8mのトレンチを2箇所設定し調査した結果、遺構、遺物は検出されなかった。念のため慎重工事を指示した。

(6) 大樽遺跡

本遺跡は、館山4・5丁目に所在し、標高269~272mに所在する。縄文時代に属するものである。隣接して西側には縄文時代の館山c遺跡、等が存在する。

今回の申請は2件あり、2件ともに個人の住宅の新築に伴うものである。Aは2m×4m、Bは2m×6mのトレンチをそれぞれ1箇所設定し調査した結果、遺構、遺物は検出されなかった。念のため慎重工事を指示した。



第4図 台ノ上遺跡



第5図 八幡堂遺跡



第6図 大樽遺跡

(7) 米沢城跡・米沢城東二の丸跡

本遺跡は、市街地の松が岬公園一帯に所在し、上杉神社、公共施設、観光センター、商店街あるいは住宅が密集して建ち並んでいる所で、丸の内1丁目地内他の標高約250mに所在する。当遺跡は、本丸、二の丸、三の丸の一部を含め、西約770m×南北約900mの約690,000m²の範囲を有し、市街地ではもっとも広範囲に分布するものである。米沢城跡に関しては、東二の丸を含め過去7回の発掘調査を実施している。

今回の分布調査で米沢城跡には申請が5件あり、A・B・Dは個人の住宅に伴うものであり、Aは $2\text{m} \times 8\text{m}$ 、Bは $2\text{m} \times 2\text{m}$ をそれぞれ1箇所、Dは $1\text{m} \times 1\text{m}$ の4箇所、Cは倉庫に伴うもので $1\text{m} \times 10\text{m}$ を2箇所のトレンチを設定しそれぞれ調査した結果、遺構、遺物は検出されなかった。また、Eに関しては $75\text{m} \times 0.6\text{m}$ を1箇所の立会い調査を実施したが、下部の遺構には支障がないものと判断したため、慎重工事を指示した。

米沢城東二の丸跡には申請が4件あり、F・G・Iは個人の住宅に伴うものであり、Fは2m×6mを1箇所、Gは1m×6mを2箇所、Hは1m×15mを2箇所、Iは1m×4mを4箇所設定し調査した結果、全ての箇所遺構、遺物は検出されなかった。念のため慎重工事を指示した。



第7図 畠沢城跡・畠沢城東二の丸跡

(8) 元立遺跡

本遺跡は、大字川井字元立の、標高240mに所在する。奈良、平安時代に属するものである。隣接して北西側500mには、同時期の西屋地b、馳上a・b遺跡等が存在する。

今回の申請2件あり、個人の住宅の新築に伴うものである。Aは2m×4mを1箇所、Bは1m×4mを2箇所のトレンチを設定し調査した結果、遺構、遺物は検出されなかった。念のため慎重工事を指示した。

(9) 城西1丁目遺跡

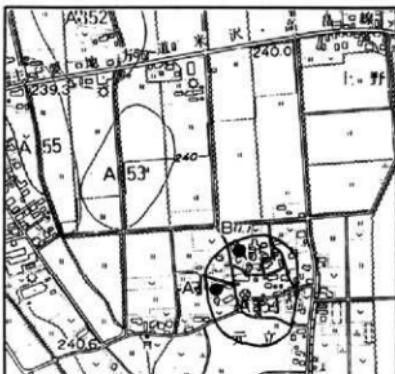
本遺跡は、城西1丁目地内の、標高248m所在する。縄文前期に属するものである。東側500mには市街地における最大の遺跡範囲を有する米沢城跡が存在する。

今回の申請は、個人の住宅の新築に伴うものである。2m×8mのトレンチを1箇所設定し調査した結果、遺構、遺物は検出されなかった。念のため慎重工事を指示した。

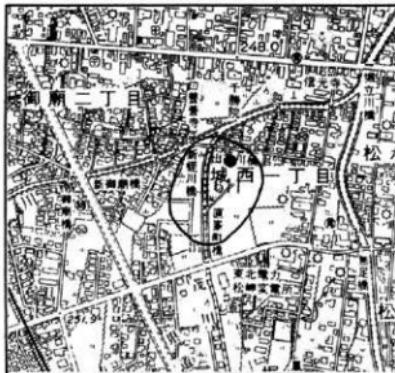
(10) 下原b遺跡

本遺跡は、通町2丁目の住宅街、標高約274mに所在する。地形的には最上川(松川)の河岸段丘に位置し、縄文時代に属するものである。北側には新設の小学校ができることから、付近は住宅化が進んでいる所である。

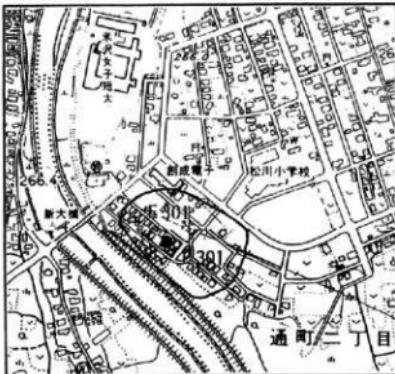
今回の申請は、共同住宅の新築に伴うものである。2m×2mのグリットを1箇所設定し調査した結果、遺構、遺物は検出されなかった。念のため慎重工事を指示した。



第8図 元立遺跡



第9図 城西1丁目遺跡



第10図 下原b遺跡

(11) 館山平城跡

本遺跡は、館山4・5丁目地内、住宅街の標高269~275mに所在する。中世期に属するものである。西側約500m付近は、大樽川と小樽川の合流地点があり、その丘陵突端部には館山城跡が存在する。

今回の申請は5件あり、Aは道路の拡張工事、Bは下水道の埋設工事に伴う公共工事であり、それぞれ6m×49m、1m×50mのトレンチを設た。C~Eは住宅の新築に伴うものであり、Cは2m×1m、D・Eは1m×8mのトレンチをそれぞれ2箇所設定し調査した結果、5件ともに遺構、遺物は検出されなかった。念のため慎重工事を指示した。

(12) 台坂遺跡

本遺跡は、花沢3丁目、下花沢2・3丁目の住宅地、標高約245mに所在する。当地域は、JR米沢駅北600mに位置し、最上川(松川)の河岸段丘に存在する。縄文時代(中期・後期)に属するものであり、段丘上には南側に隣接して下花沢a遺跡、西側約300mには花沢a・b遺跡等の縄文時代の遺跡が集中する所でもある。

今回の申請は4件あり、4件の全てが住宅の新築に伴うものであり、Aが2m×2mを3箇所、Bが1m×5mを2箇所、Cは1m×4mを2箇所、Dは0.5m×8mのトレンチを8箇所設け、それぞれ調査した結果、4件ともに遺構、遺物は検出されなかった。念のため慎重工事を指示した。



第11図 館山平城跡



第12図 台坂遺跡

(13) 下花沢b遺跡

本遺跡は、万世町片子地内の標高257mに所在する。当地域は、JR米沢駅西側約400mに位置し、最上川の河岸段丘に存在する。

今回の申請は2件あり、2件ともに住宅の新築に伴うものであり、Aが $2\text{m} \times 4\text{m}$ を1箇所、Bが $2\text{m} \times 5\text{m}$ 、2箇所設定し、それぞれ調査した結果、2件ともに遺構、遺物は検出されなかった。念のため慎重工事を指示した。

(14) 花沢b遺跡

本遺跡は、駅前4丁目、下花沢2丁目の、標高249mに所在する。当地域は、JR米沢駅西側約400mに位置し、最上川の河岸段丘に存在する。縄文時代に属し、段丘上には北側に台坂、下花沢a遺跡等の縄文の遺跡が集中する所である。

今回の申請は2件あり、2件ともに住宅の新築に伴うものであり、Aが $2\text{m} \times 4\text{m}$ を1箇所、Bが $1.5\text{m} \times 5\text{m}$ を2箇所設け、調査した結果、2件ともに遺構、遺物は検出されなかった。念のため慎重工事を指示した。

(15) 上浅川a・b遺跡

本遺跡は、大字浅川地内の標高230mに所在する。当地域は天王川の左岸段丘に存在し、当遺跡の東側一帯には独立丘陵の戸塚山があり、その丘陵には約200基の古墳群が存在する。

申請は、道路拡幅工事に伴うものであり、 $12\text{m} \times 340\text{m}$ を立会い調査した結果、遺構等は検出されなかった。念のため慎重工事を指示した。



第13図 下花沢b遺跡



第14図 花沢b遺跡



第15図 上浅川a・b遺跡

(16) 中谷地 a 遺跡

本遺跡は、大字竹井字荒屋地内の標高243mに所在する。当地域は天王川の左岸段丘に存在し、当遺跡の南側には奈良、平安及び中世の中の目遺跡、北側には同時期の荒屋遺跡がそれぞれ約15,000m²の広範囲に存在する所である。

今回の申請は、住宅の新築に伴うものであり、1m×5mを2箇所設定し調査した結果、遺構、遺物は検出されなかった。念のため慎重工事を指示した。

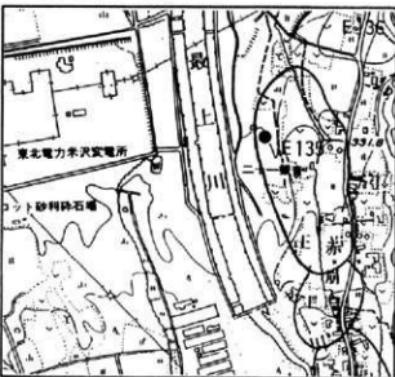


第16図 中谷地 a 遺跡

(17) 赤崩C遺跡

本遺跡は、大字赤崩字観音下地内の標高約330mに所在する。最上川の河岸段丘に存在し、縄文時代（中期）に属するものであり、段丘上の南側に隣接して赤崩a・b等の縄文時代の遺跡が集中する所である。

今回の申請は、工場の新築に伴うものであり、1m×10mを2箇所設定し、調査した結果、遺構、遺物は検出されなかった。念のため慎重工事を指示した。

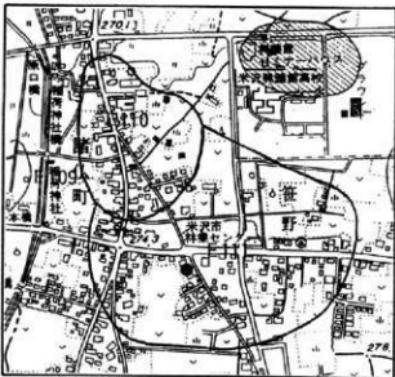


第17図 赤崩C遺跡

(18) 大塙A遺跡

本遺跡は、大字笹野地内の標高約274m所在する。縄文時代（中期・後期）に属するものであり、北西側に隣接して大塙山、東側100mには大塙A遺跡（前期・中期）等の縄文時代の遺跡が集中する所である。

今回の申請は、住宅の新築に伴うものであり、1m×4mを2箇所設定し、調査した結果、遺構、遺物は検出されなかった。念のため慎重工事を指示した。



第18図 大塙A遺跡

(19) 東屋敷遺跡

本遺跡は、大字竹井字三保地内の水田地帯、標高345mに所在する。当地域は天王川の左岸段丘に存在し、当遺跡の北側には奈良、平安及び中世の中の目、中谷地、荒屋遺跡が広範囲に存在する所である。

今回の申請は、住宅の新築に伴うものであり、1m×5mを2箇所設定し調査した結果、遺構、遺物は検出されなかった。念のため慎重工事を指示した。

(20) 牛森遺跡

本遺跡は、万世町牛森地内の標高約266m所在する。縄文時代に属するものである。西側500mには、縄文時代の早期から晩期までにわたる二タ俣b、柿ノ木、大清水、水神前、小谷地遺跡等が存在する地域である。

今回の申請は、住宅の新築に伴うものであり、1m×8mを2箇所を設定し調査した結果、遺構、遺物は検出されなかった。念のため慎重工事を指示した。

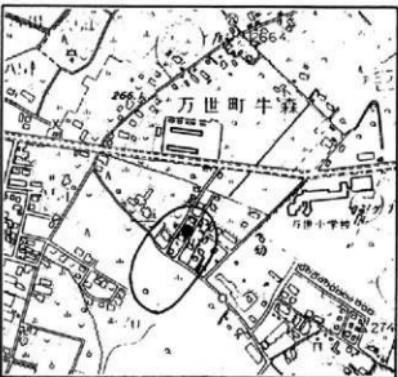
(21) 笹野館ノ内館a跡

本遺跡は、笹野本町字間口山地内の標高約266m所在する。中世に属するものである。西側500mには、縄文時代の早期から晩期までにわたる二タ俣b、柿ノ木、大清水、水神前、小谷地遺跡等が存在する地域である。

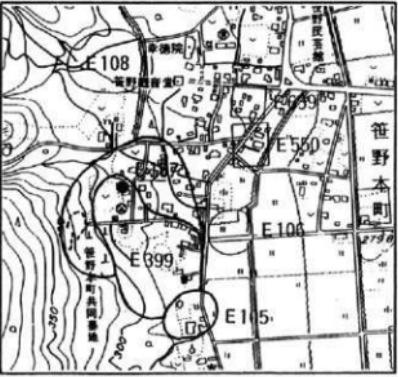
今回の申請は、住宅の新築に伴うものであり、1m×8mを2箇所を設定し調査した結果、遺構、遺物は検出されなかった。念のため慎重工事を指示した。



第19図 東屋敷遺跡



第20図 牛森遺跡



第21図 笹野館ノ内館a跡

(22) 成島遺跡

本遺跡は、笠野本町字間口山地内の標高約266m所在する。中世に属するものである。西侧500mには、縄文時代の早期から晚期までにわたる二タ俣b、柿ノ木、大清水、水神前、小谷地遺跡等が存在する地域である。

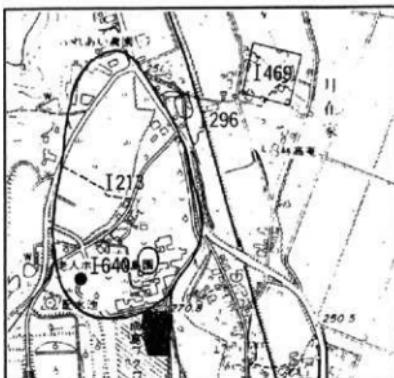
今回の申請は、住宅の新築に伴うものであり、1m×8mを2箇所を設定し調査した結果、遺構、遺物は検出されなかった。念のため慎重工事を指示した。

(23) 大浦c遺跡

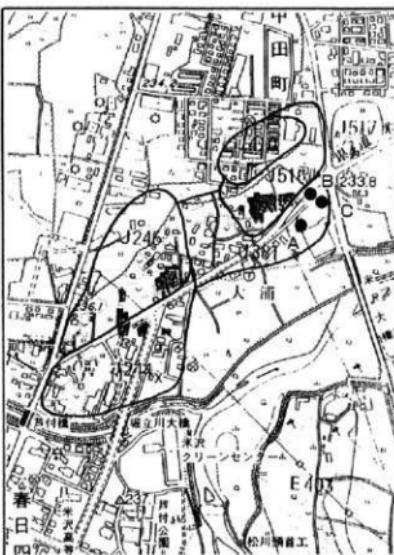
本遺跡は、中田町地内の標高約233mに所在する。当地域は最上川の左岸段丘に存在し、当遺跡の南西側には大浦a・b遺跡、北側には大浦d遺跡、大浦館跡等の奈良、平安及び中世に属する遺跡が隣接して広範囲に存在する。

西側に隣接する大浦B遺跡（平成元年）の発掘調査では、一辺が39m×49mの方形に区画された柵列に南門が付随し整然と配置された奈良時代の建物群と漆紙文書が検出した。建物群は8世紀中葉から同後期及び8世紀後葉から末期の2時期にわたって遺在するもので、漆紙文書葉延暦23年（804）の具注暦と判明している。

今回の申請は3件あり、Aは店舗の新築に伴うものであり、1m×6mを4箇所、B・Cは広告塔の設置であり、1m×1mを2箇所を調査した結果、遺構確認面は搅乱されており、遺構、遺物は検出されなかった。念のため慎重工事を指示した。



第22図 成島遺跡



第23図 大浦c遺跡



1 古志田町調査区



2 李山調査区

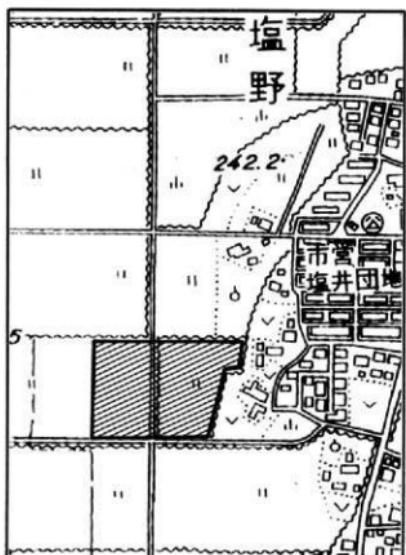


3 林泉寺調査区

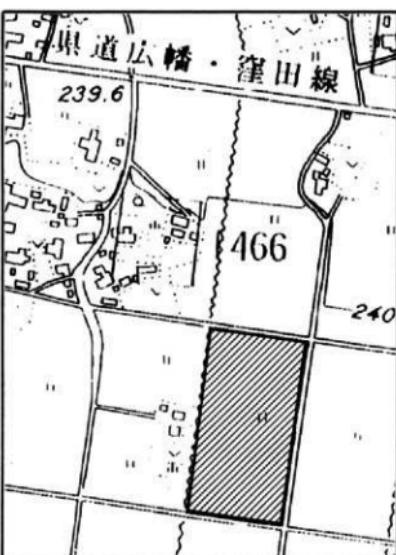


4 下新田調査区

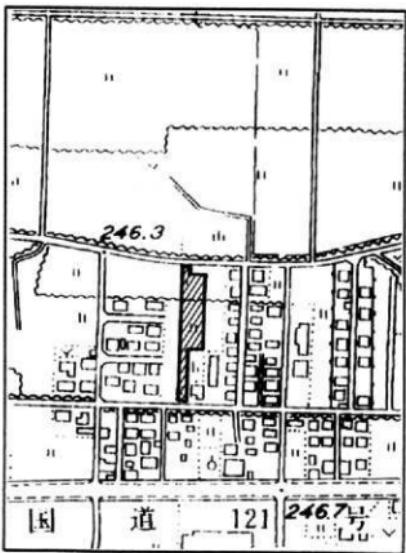
第24図 分布調査区範囲位置図(1)



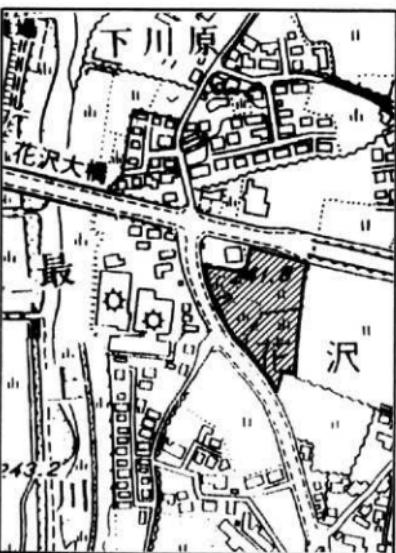
5 堀井町調査区



6 広橋町調査区

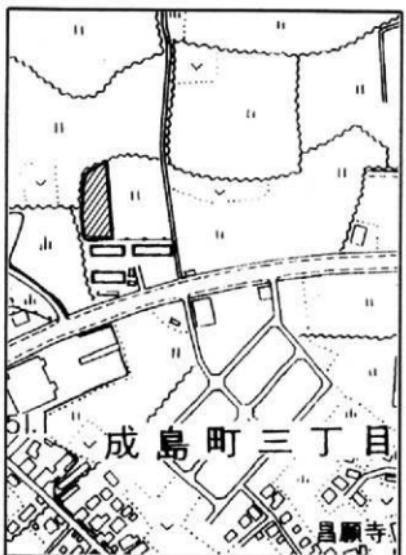


7 徳町調査区

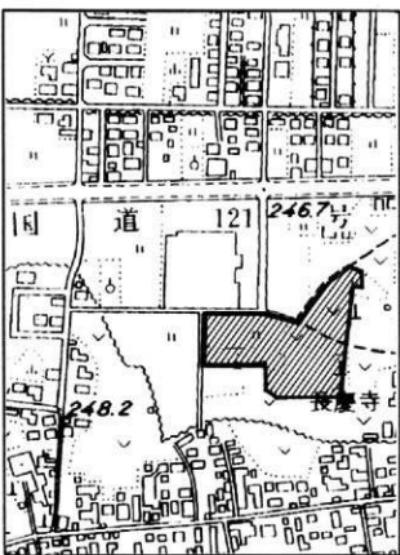


8 花沢町調査区

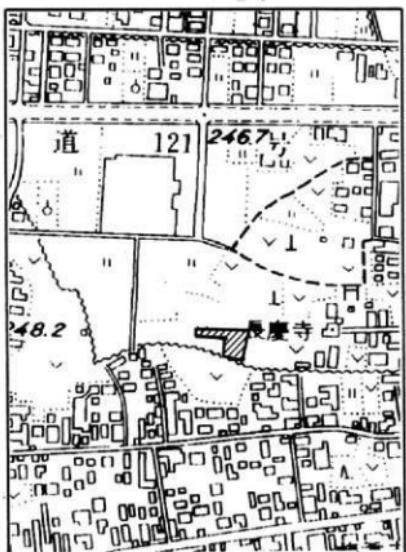
第25図 分布調査区範囲位置図(2)



9 成島町調査区



10 徳町調査区

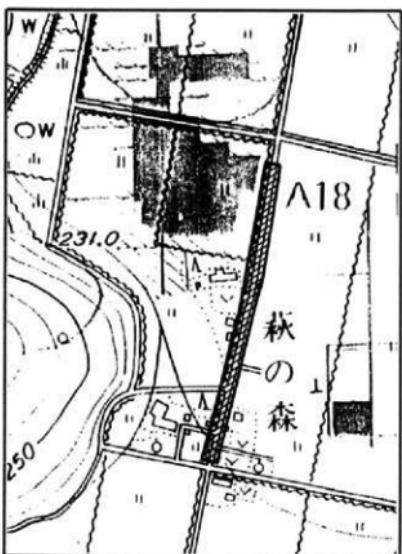


11 徳町調査区



12 六郷町調査区

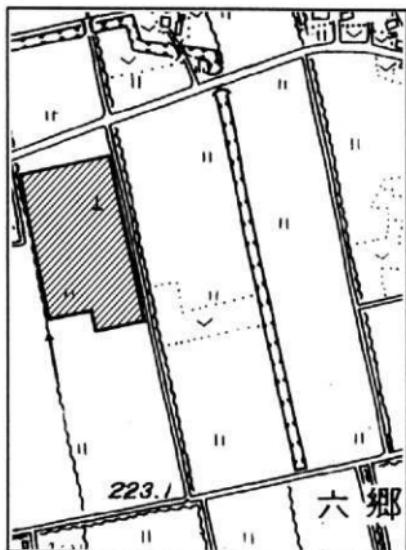
第26図 分布調査区範囲位置図(3)



13 長手調査区



14 御廟調査区



15 六郷町調査区

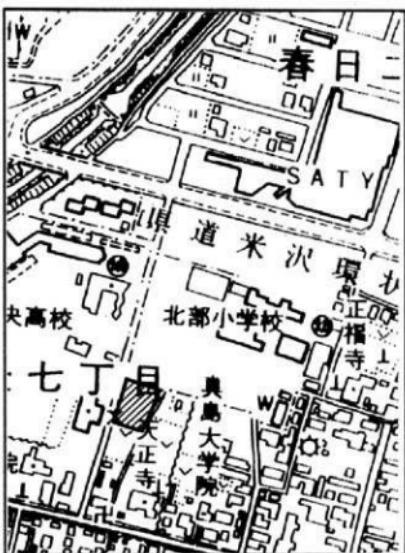


16 三沢調査区

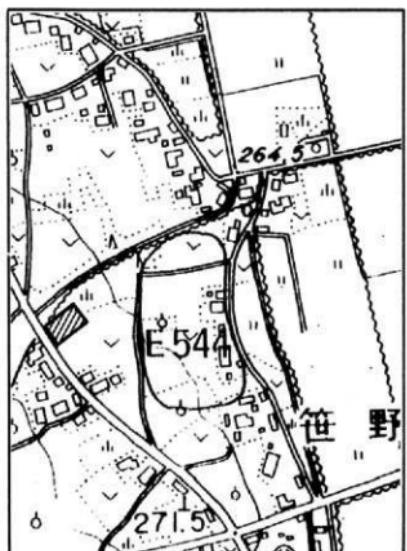
第27図 分布調査区範囲位置図(4)



17 館山調査区



18 中央調査区



19 笠野調査区



20 徳町調査区

第Ⅱ節 台ノ上遺跡

1 遺跡の概要

本遺跡は市街地の南東部、吾妻町地内に位置する。遺跡の立地する地形は旧松川によって形成された自然堤防で南北が740m、東西230mの範囲にわたって存在する縄文中期の大集落跡である。遺跡の発見は、大正11年（1922）頃の米坂線工事の際に発見されたのが最初で、その後、昭和37年（1962）に米沢女子高等学校、昭和45年（1970）に置賜考古学会等が試掘調査を実施している。

米沢市教育委員会としては、平成3年と平成4年（1991）に市道拡幅工事に伴う調査、平成7年と平成8年（1996）に個人の基盤整備に伴う調査、平成10年（1998）には下水道工事に関連した調査と過去5回の緊急調査を実施している。

この中で、平成7・8年の調査では、約3,000m²の範囲から竪穴住居跡58棟、土壙と墓墳が約300基、幼児を埋葬したと推測される埋甕2基の他、完形土器300個や土偶100点、我が国最古級の土笛等約20万点の膨大な遺物が出土している。これらのことから、県内を代表する縄文中期の遺跡として注目されている。

今回の調査は、個人の住宅新築に伴う緊急調査で、台ノ上遺跡第6次調査となる。

2 調査の経過

調査は、平成11年5月6日に表土剥離より開始した。遺構の存在を確認する面整理、精査を2日間進めたところ、縄文中期の土壙や住居跡と推測される土色変化が認められた。遺構の新旧関係を把握しながら、5月8日から遺構の掘り下げを開始した。

遺構は、土壙に土器が埋納している墓墳を中心であるが、竪穴住居跡5棟も検出した。5月14日では掘り下げを完了し、遺構の図面作成、写真撮影を行い5月17日に現地説明会を開催した。5月18日には説明会のために残しておいた土器を取り上げ、今回の調査を終了した。

3 検出遺構

今回の調査区からは竪穴住居跡（HY）5棟、土壙（DY）19基の総計24基の遺構群が認められた。これらの遺構群はDY24の近代の土壙を除き、出土遺物から判断して縄文中期中葉の大木7a式～大木8b式併行に位置する遺構群である。各遺構について説明したい。

◎竪穴住居跡（HY 1～3・10・14）

129.6m²の調査区から5棟の竪穴住居跡が確認されたことは、本遺跡がいかに密度が高い遺跡で分布しているかを物語っている。また今回の調査区が台地の西側縁辺に位置しているのが遺構密集の要因ともいえる。小範囲であり、完掘できたのはHY 1・14の2棟だけであった。

◎HY 1

調査区の南西部に位置する。DY 5・16・20等の土壙が重複し、平面形状はほぼ円形を呈する住居跡である。長径は3.3m、短径は3.1mである。遺跡としては96点出土しており、大半は

土器片で94点、剥片2点であった。土器は貼付文が多く認められた。大木8a式併行の土器が主体をなす。柱穴、炉跡は確認できなかった。壁はゆるやかに立上る形態でポール状に掘り込んでいる。中央部に重複するDY16は大木7b式併行の時期にあり、土壌構築後に竪穴住居を構築したと推測される。

◎HY2

前述したHY1の南方に重複して構築された竪穴住居跡である。深さは15cm、壁はゆるやかに立上る。床面にMY10の埋設土器が認められる。住居跡に伴うものかは判別できなかった。

DY12・13の大型土壌があり、柱穴等は確認されなかった。遺物としては202点出土している。94点の土器片と8点の剥片である。貼付文と沈線で構成する文様を有する土器群で大木8a式併行の竪穴住居跡といえよう。

◎HY3

東側の南方に位置する竪穴住居跡で4分の1を完掘したと推測される。床面にはP1～P8の柱穴群が確認されており、何回か建て替えが行われたことがうかがえる。覆土からは土偶脚部が出土している。他に89点の遺物が出土しており、86点が土器片であった。剥片は3点である。HY2と同様な年代が想定される。

◎HY10

調査区の北方端に位置し、全体の5分の1を完掘したと考えている。土壌と重複する形態であり、床面にビット4基が認められた。小範囲なので規模は不明と言わざるを得ない。遺物としては剥片3点で土器は認められなかった。

◎HY14

調査区の中央部やや北方に位置する竪穴住居跡であり、唯一全容が把握できる住居跡である。平面形状は橢円形状を呈し、長径5.5m、短径3.8m、深さは40cmを測る。壁はゆるやかに立上る。床面は平坦で中央に長さ2.2m、幅1.3mの浅いポール状の穴が認められた。炭化物や焼土が混合していることから炉跡と推測される。

炉跡には深鉢形土器がたおれた状態で出土している。土器は東から西へたおれた状態であり、竪穴住居跡が埋没する際の土砂混入方向を示しているといえよう。周辺には土器片、石棒の未完成品が散乱している状況であった。竪穴住居跡廃絶後にゴミステ穴として再利用された痕跡と理解したい。土器片は550点、剥片は33点出土している。竪穴住居跡の年代は大木8b式併行である。

柱穴は壁面に3本確認された。HY14P1～P3であり、斜めに掘り込んでいるのが特徴である。西方に周溝が認められ、幅12～14cm、長さ2.3mを測る。北東部には舌状に張り出した箇所があり、祭壇とも考えられる。

◎土壌(DY4～9・11～13・15～24)

底面が広くなるフ拉斯コ形を呈する形態が多く認められた。土壌群の中でDY24は近代に位置する土壌であり、この土壌を除く他の土壌群について説明を加えたい。

◎DY12・13・15A・16・18・19

深さが140~180cmを測るもので底面に土器が認められた土壌群であり、最終的に墓壙として利用されたものと推測される。D Y13・18は大木7 b式併行の深鉢形土器を伴出した土壙であり、今回の調査区においては古い段階に構築したといえる。D Y12・8は大木8 a式併行の土器群を伴出することから、時間的差をもって構築されていったことがうかがえる。D Y15Aは土器口縁部だけを土壙中央に設置した形態を呈していた。

◎DY (6~8・11・17)

深さが平均50cmと浅い形態の土壙群である。これらの土壙群は最初から墓壙を目的として掘り込んだ土壙と考えられる。小規模な形態から判断して幼児用と推測した。先述した土壙群は当初は貯蔵を目的として構築した土壙群と考えられる。

◎MY10

H Y 1 の南側に位置する場所にある。口縁部が削平によって欠損して検出された埋葬土器である。土器内部覆土からの出土遺物はなかった。幼児用の埋壺であろう。

4 出土遺物

総数で4,534点出土している。内訳は土器片4,173点、剥片267点であり、出土数の9割を土器群が占める。主なものを述べると復元土器5点、石器12点、土製品2点、石製品1点、凹石20点、磨石34点、石皿16点、石棒未完成品6点となる。実測図や写真で示した遺物について分類を加え説明したい。

◎出土土器

深鉢形を呈する形態の土器群であり、若干小形土器が認められる程度である。出土した土器片は小破片が多く、復元できたのは5点にすぎない。これらの土器については時間の都合上写真で示した。小形土器は21点出土している。これらを口縁部片、胴部片、底部片に分けて見てみると次のようになる。口縁部片478点、胴部片3,546点、底部片128点、小形土器は口縁部片14点、胴部片6点、底部片1点となる。確実な底部片からいえば今回の調査区からは128個の深鉢土器が認められたことになる。

文様の表出技法からみれば、粘土紐を貼付して突起部やブリッヂ状を作り出す文様構成が多く認められる。単位文様とすれば「S」字状の渦巻がもっとも多く認められた。地文は3本から5本の前々段多条の原体を施文した繩文を有するのが代表である。土器、土製品、石器、石製品、礫石器の順で説明したい。

A群土器 [図版4]

口縁部文様帯と胴部文様帯に分けられる文様構成であり、本群土器は図版7に代表される文様である。舌状の突起部を配する口縁部文様帯で沈線文を主体としているのが特徴である。色調はやや黒っぽい赤褐色と呈する。図版8の11・12・15~17等が上げられる。大木7 b式併行の土器群である。粘土紐も幅のせまい貼付文であり、口縁部にブリッヂ状を配する大木8 b式併行の土器群の前々段階と理解される。出土数の割合からいえば3割位を占める状況であった。出土箇所としてはD Y13・18の土壙底部が上げられる。

◎B群土器 [図版8 10・14・21]

8図版10は口縁部片であり、横位の「S」字状文に斜位のキザミ文をヘラ状工具で配する文様である。下位に縦位の「S」字状文、そして橢円形状文を横位に転回する構成である。胴上部は三角形状文を沈線で配している。同図14は「渦巻文」を主体とした文様構成であり、口唇分が欠損している。これらは大木8a式併行の土器群である。

◎C群土器 [図版1~4]

HY14を中心に出土している土器群であり、先述したB群とともに出土土器の中心をなす土器群である。特徴は空間を有する大形の突起を口縁部に配する文様構成であり、貼付した粘土を丹念に磨いている。図版5の4bは口縁部だけであるがほぼ完形に復元できた土器である。8単位の突起部で構成する口縁部文様帶、無文帶を配し、胴部文様帶と区別する空間を有する構成と考えられる。地文の繩文を複節の原体を用いて施文している。これらの土器群は大木8b式併行と考えたい。色調は白っぽい褐色を呈する。まとめると粘土紐を渦巻きや蔓状文を立体的に貼付するのが特徴である。

◎土製品 [図版1・2 第36図]

豎穴住居跡HY3の床面覆土から出土した土偶脚部1点がある。現状で高さ4cm、幅6.5cm、厚さ2.8cmを測る。沈線によって文様が描かれており、下半身の部分を表現した土偶であると考えられる。1aが下半身の前の正面、1bが後の背面を表現している。土偶は女性を模している形態が常識であり、安産や木の実等の豊作等を祈願した遺物であろう。

同図2は円盤状土製品である。長径は7.5cmを測る円形状を呈するもので、深鉢土器の破片を再利用して製作されたものである。DY16覆土から出土している。用途としては遊具の一種、あるいは呪術的要素を有するものと考える二通りが推測される。第3・4次調査区からは1,000点をこえる出土がある。円盤状の他に三角形状製品も出土している。

◎石器 [図版9 第36図3~5]

石鏃2点、石匙3点、石箆状石器2点、搔器3点、石錐1点、磨製石斧1点、剥片110点が出土している。石材は磨製石斧を除き珪質頁岩を使用している。磨製石斧は緑色を呈する岩石であり、研磨によって仕上げられている。刃部が現存する形態であり、当部が欠損している。磨製石斧の場合には、このような欠損状態を有するのが多く認められる。これは柄着装に要因を求めることができる。折れ面は柄着装と出ている部分の境目と理解されるからである。

◎石製品 [図版11 9~12]

素材に石英粗面岩を使用した石棒である。DY17から出土した11は欠損面を有する石棒で、先端部である。石棒は祭祀に関連する遺物であり、第1次から第5次にわたる調査区からは1点だけ完形の状態で出土している。この事例から理解されることは、意図的にこわす場合が多いと想定される。他の9・10・12は研磨面が認められず未完成品であろう。

◎礫石器 [図版10]

形態としては凹石、石皿、磨石がある。凹石は両面を使用しているものが多く認められた。石皿はすべて破片で占められる。磨石は断面が三角形を呈するものが大半である。

5 まとめ

台ノ上遺跡は、本市において古くから周知されたにもかかわらず、宅地化が進み遺跡の大半は住宅地となっている。幸いにも遺跡のほぼ中心にあたる箇所が農地として現在に至っている。3・4次調査はこの農地の基盤整備に伴う緊急調査として平成7・8年に調査が実施された。その結果、堅穴住居跡88棟、土壙約250基、墓壙約20基等の遺構と整理箱約1,500箱に相当する遺物が出土している。

住居跡は約20m前後をなす大型住居跡4棟や祭祀遺物約300点も含まれている。とりわけ注目されるのは土偶で、多種多様な形態を示しておりユニークな表情を示す顔などから当時の豊かな精神構造が読み取れる。ちなみに米沢市における土偶の8割は台ノ上遺跡の出土で占められ県内でも指折りの出土数である。

集落跡は、これまでの分布調査を総合すると約170,000m²の広さをもつ大規模集落で、置賜地方の縄文中期の遺跡としては最大規模を誇ると想定される。しかも、河川によって自然に区画された集落跡は、古墳時代等の環濠集落を彷彿させる構成である。

今回の調査は、台ノ上遺跡の西端に近い場所に相当する。東側は比較的古い大木7a式や大木8a式が集中していることが確認されており、今回の8b式を主体とする時期と異なっていることがわかった。台ノ上遺跡の存在や密度を考える上で注目される。

縄文中期の集落の多くは大地の縁辺に墓壙や土壙を配置することはよく知られる。今回の内容もほぼ一致することになる。

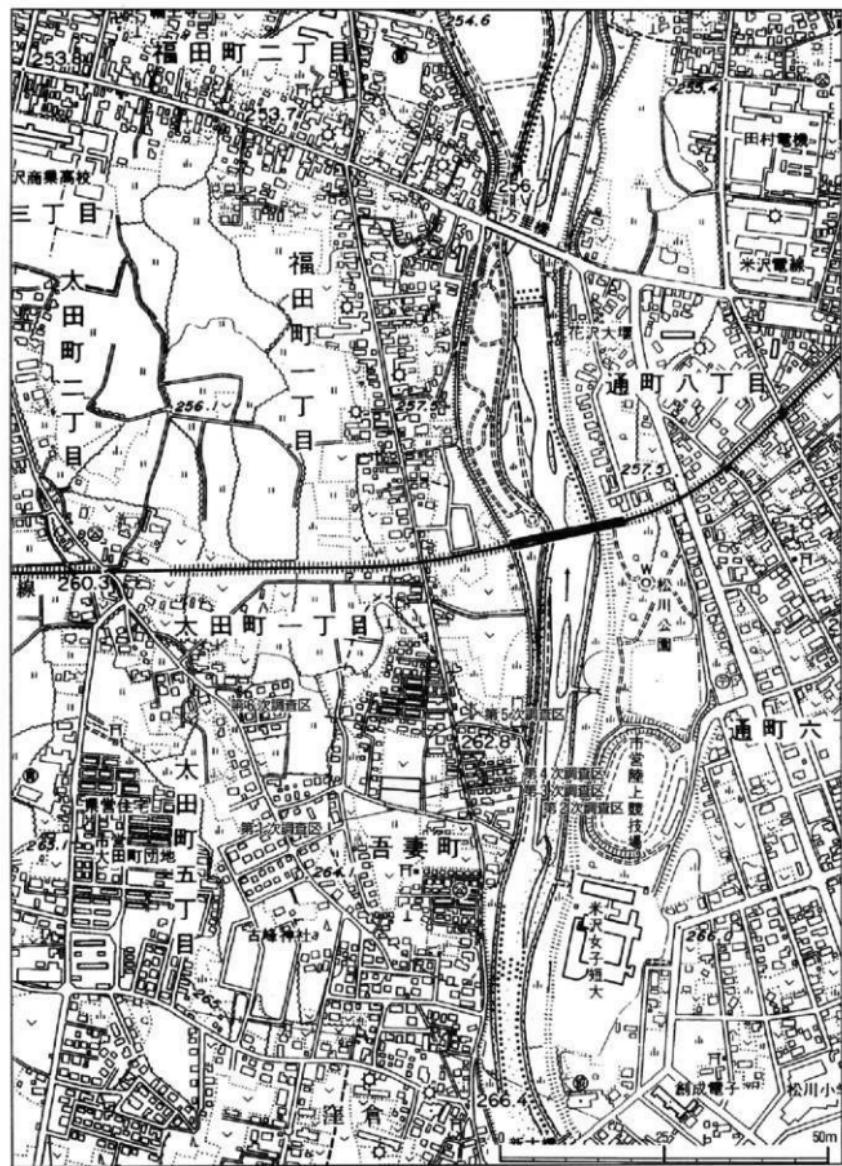
台ノ上遺跡からは糸魚川産の蛇紋岩製品の磨製石斧や長野県の和田岬産の黒曜石、吾妻山の溶岩等の石材を使用しており、かなり広域に物資の移動が行われていたこともわかっている。

青森県の三内丸山遺跡が全国規模の縄文集落として注目されている。こういった集落は局部的なものではなく、全国各地に地域の中核として存在すると想定され、山形県内には少なくとも盆地や平野を単位として2~3箇所の遺跡が存在したものと考えられている。

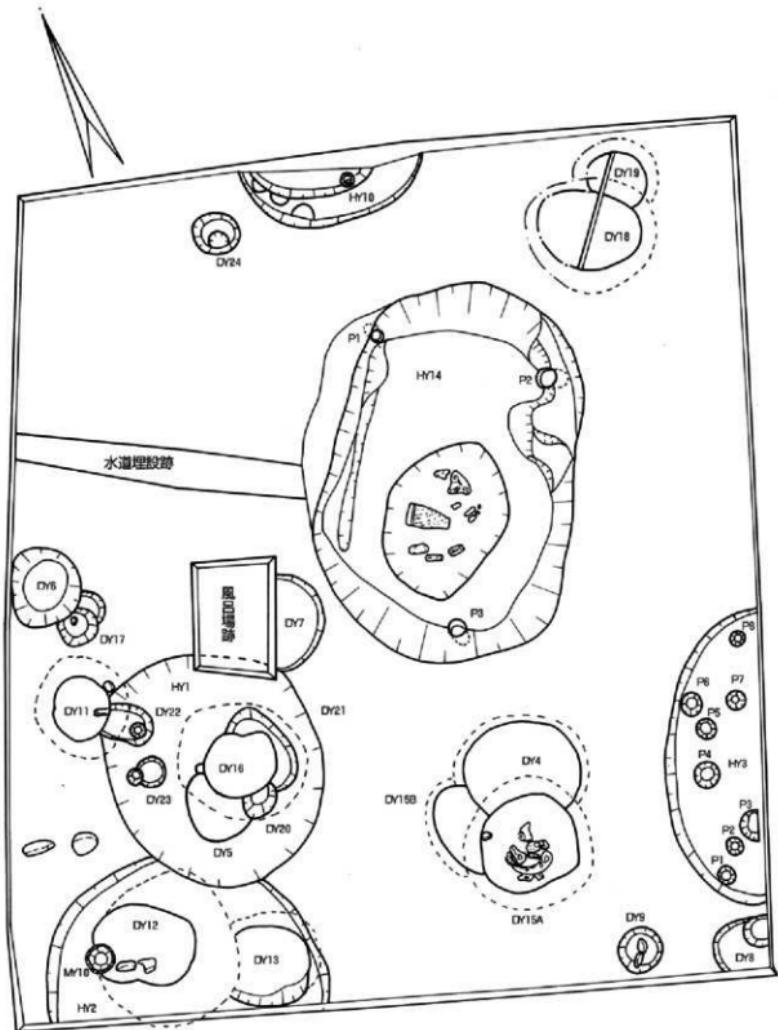
縄文時代の集落には十数棟の堅穴住居跡を単位とした小規模集落から50棟前後の中規模集落、100~150棟前後の大規模集落、そして200~500棟を単位とした中核集落が存在していたと考えられる。もちろん、小規模集落が100とした場合の中核集落は1くらいの割合とみられ、中核集落には各地域の拠点として、物資の交換や情報基地の役割を示していたものと予想される。

台ノ上遺跡も遺跡規模や遺構・遺物の内容からも中核集落の風格を示しており、東北南部における貴重な存在といえる。今後も調査を重ねることにより、一層の全容解明につながるものと確信している。また、今回の調査で住宅地になっている箇所でも以外と遺構面が削平されていなかったことも成果といえる。

現代の工法と異なっていることが遺構を保護する点につながっており、遺跡範囲の大半を占める住宅地の大半には遺構が残存していると考えてまちがいない。従って、このようなケースが今後増加すると予想される。なにぶんにも土地所有者の理解が必要であり、今回お世話になりました山岸久悦氏、地元の方々、関係者に対して心から感謝を申し上げます。

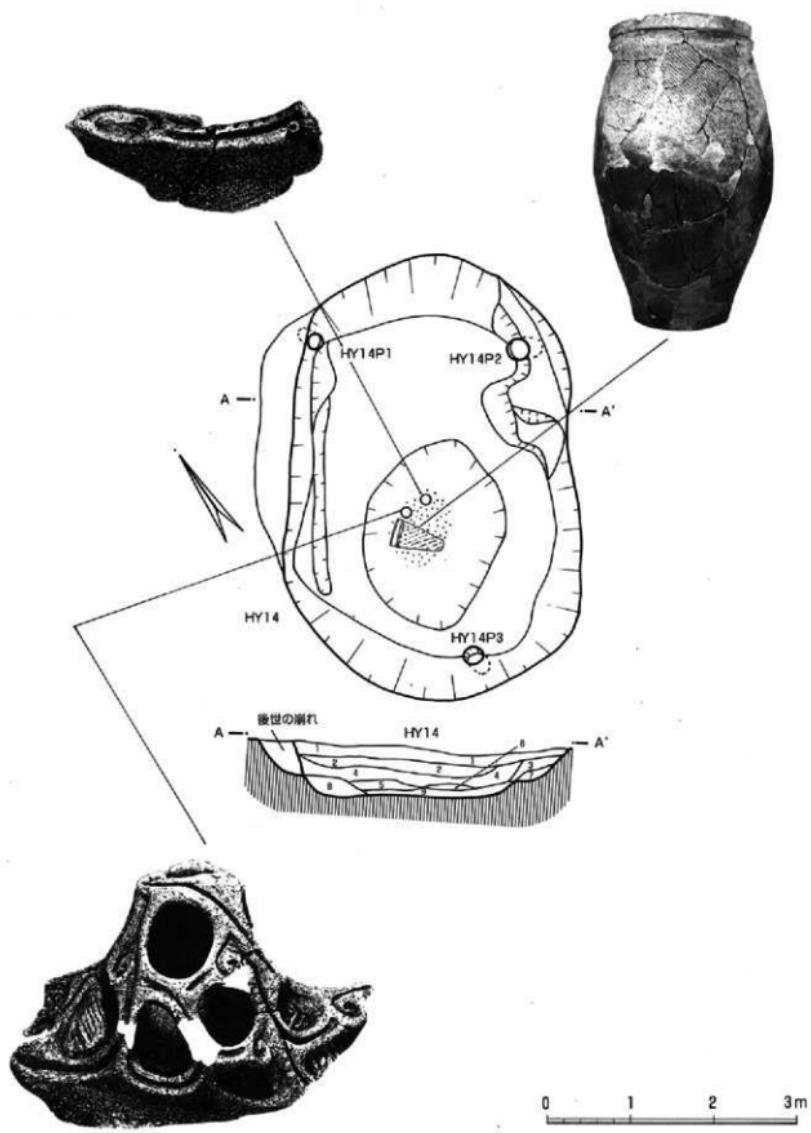


第29図 台ノ上遺跡位置図

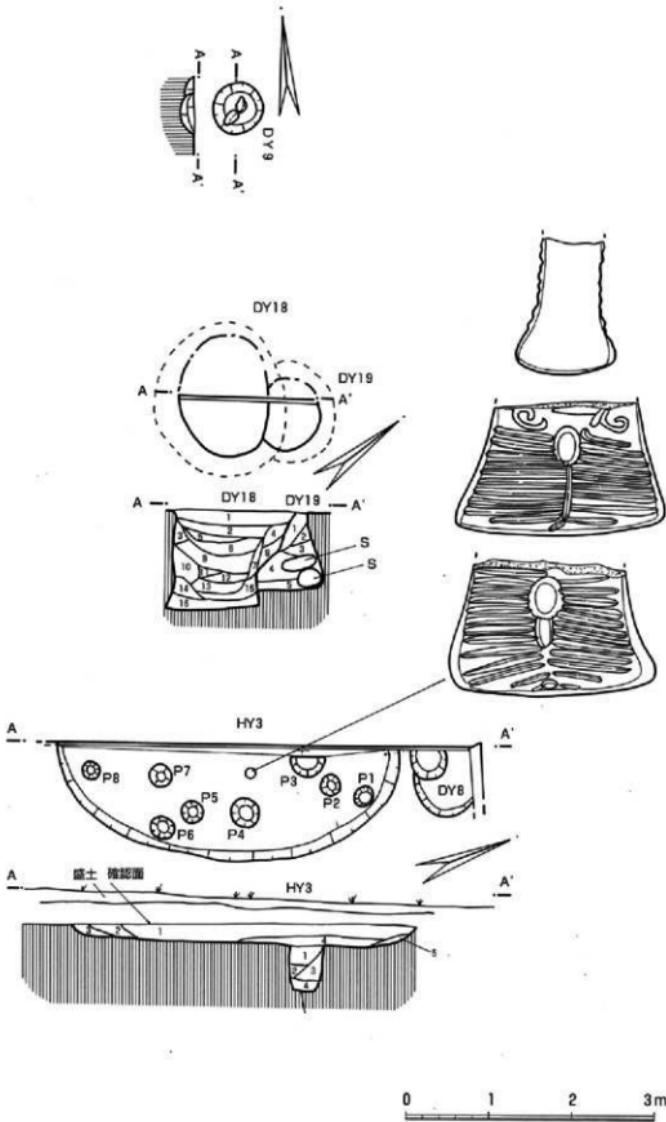


0 1. 2 3 4 m

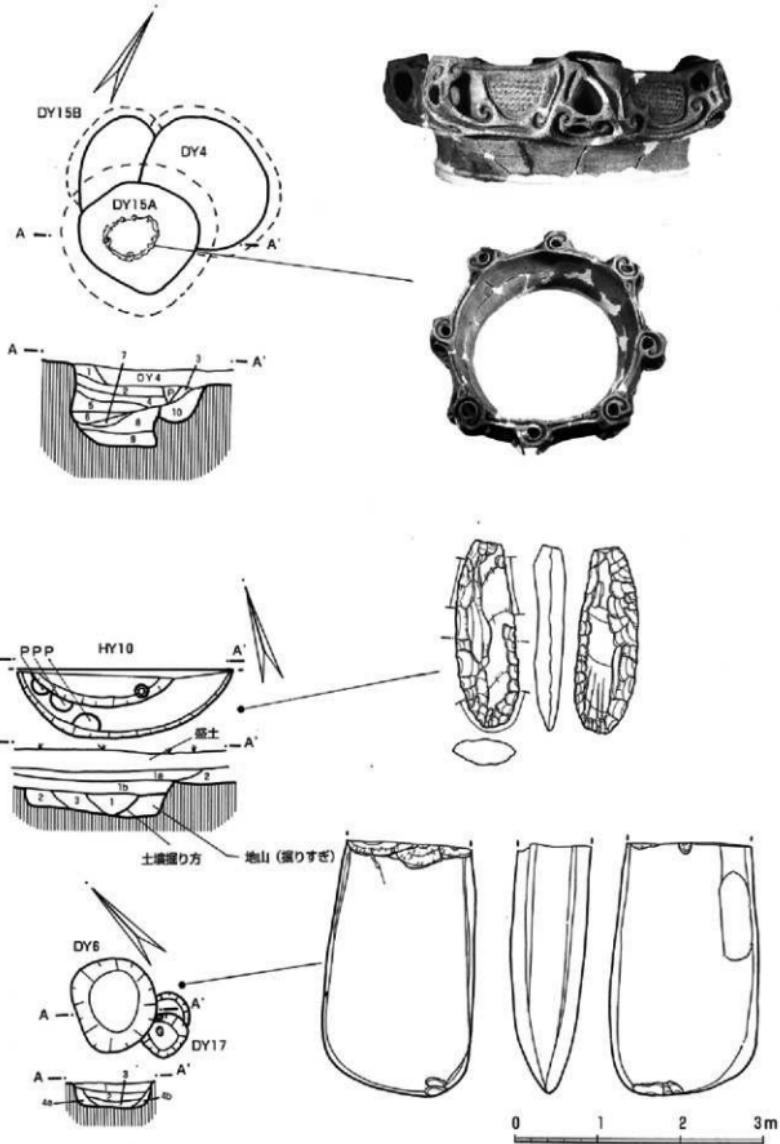
第30図 台ノ上遺跡第6次調査区遺構全体図(1)



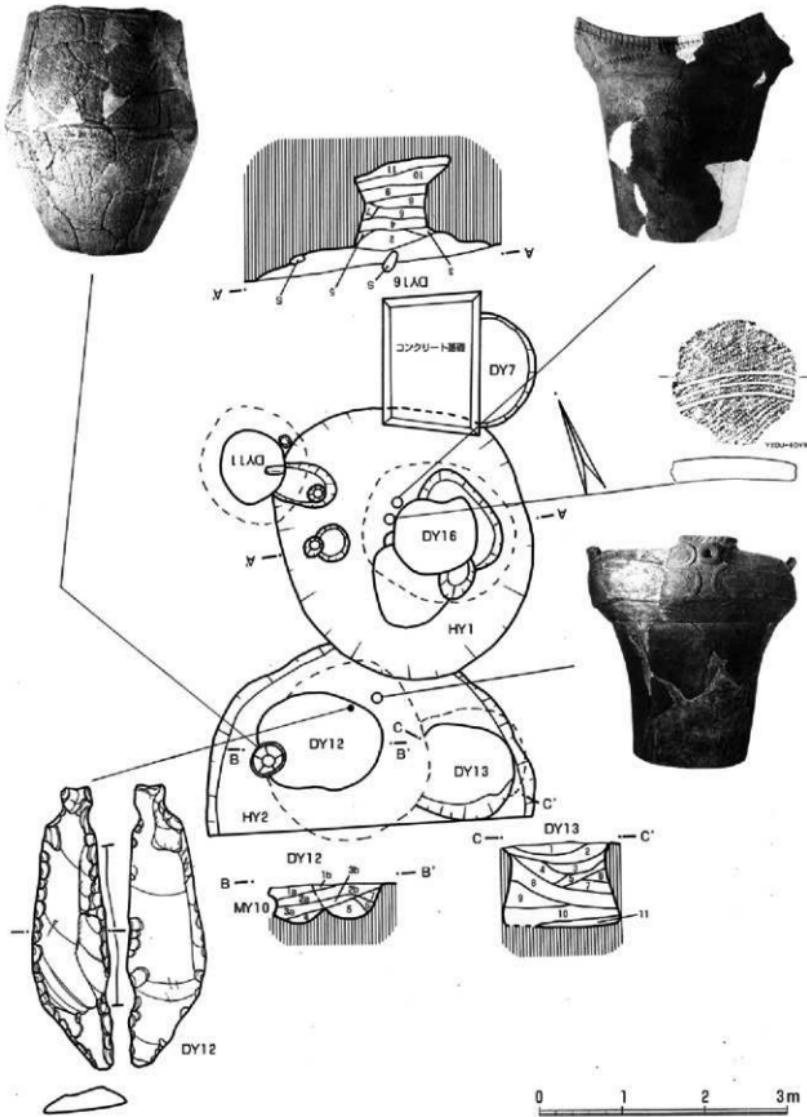
第31図 台ノ上遺跡第6次調査区HY14平面図(2)



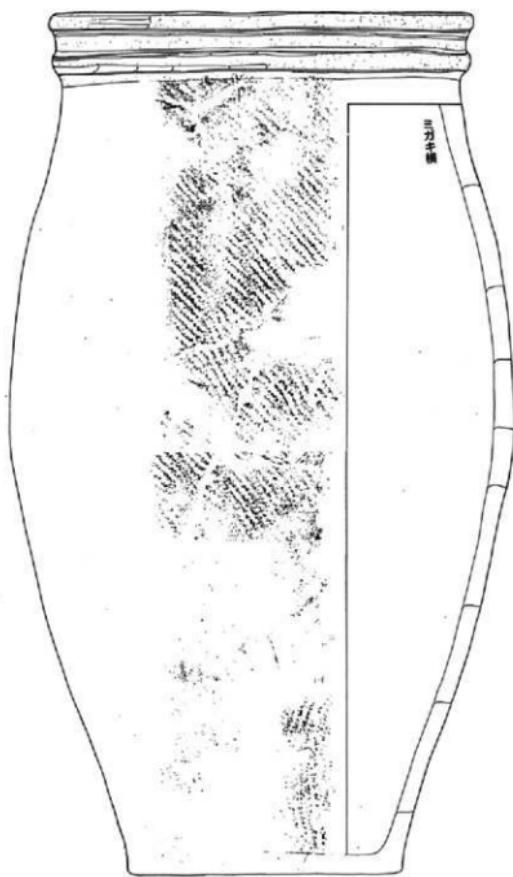
第32図 台ノ上遺跡第6次調査区HY 3・DY 9・18・19平面図(3)



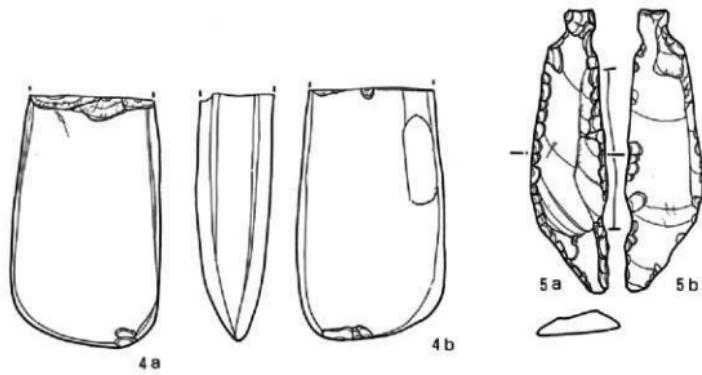
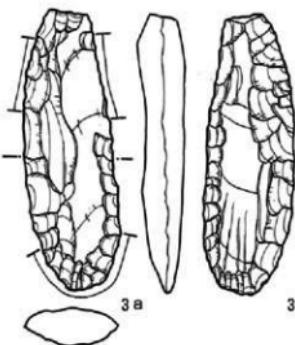
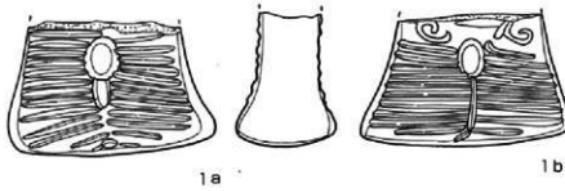
第33図 台ノ上遺跡第6次調査区HY 3・DY 9・18・19平面図(4)



第34図 台ノ上遺跡第6次調査区DY12・13・16平面図(5)



第35図 台ノ上遺跡第6次調査区出土遺物実測図(6)



第36図 台ノ上遺跡第6次調査区出土遺物実測図(7)

第Ⅲ節 脇之沢遺跡

1 遺跡の概要

米沢市の南西部に位置する入田沢地区に立地する。米沢から喜多方へと通じる国道121号線が走る当地区は吾妻連峰大森山、家森山に源を発する小樽川の流域に開けた集落である。河川の両岸は発達した段丘が形成され、多くの遺跡が確認されている。

遺跡は小樽川に合流する沢のひとつである脇之沢流域に存在することから脇之沢と命名された。この沢は焼物に適した粘土が採掘されたことで知られ、沢の入口一帯はかわかけ坂と呼ばれ、焼物の破片が散乱していた場所である。窯は戸長里窯跡と呼ばれ、昭和60年（1985）8月に調査が実施されている。

縄文時代の遺跡としては、平成2年（1990）に湯ノ沢橋B遺跡、平成8年（1996）に上ノ町b遺跡の調査を実施している。両遺跡とも住居跡等は検出されなかった。

遺跡の発見は林道工事の際に偶然発見されたものであり、剥片が多数削平面から出土したことによる。近くに石器の石材となる良質な頁岩を含む岩石が認められることから、石器石材供給地の遺跡ではないかと想定された。本市の一ノ坂遺跡は前期初頭の石器製作遺跡として注目され、国指定遺跡となっている。この遺跡との関連性も十分に予想され今日の調査となった。現地は伐採されたことから広い空間を持つ林の広場といった感じの場所である。土器片の出土から縄文前期初頭の遺跡であると認識していた。

2 調査の経過

今回の調査区は山の中であり、標高は最高地で450mある。幸いにも遺跡発見のきっかけとなった林道が使用できる状態であり、調査近くまで自動車で行くことができた。

調査は夏も終わりに近づいた平成11年8月23日から開始した。第37図で示すように木の柵が少ないAからT地点の5箇所を選定し、上部に配したAトレンチから調査を開始した。表土を剥離するとすぐに剥片が出土する状況であり、周辺には林道工事によって掘りおこされた大型の原石が産出していた。この原石は土地所有者の承諾を得て、埋蔵文化財資料室に運搬している。Aトレンチは幅1m、長さ8.4mの範囲であり、2基の遺構が確認された。遺物は剥片類が數十点で土器は認められなかった。

そこから29.4m北方にBトレンチ、さらに19m離れた地点にCトレンチ、並列して4m離れた場所にDトレンチを配置した。Cトレンチから40m南方にEトレンチ、一番下方にFトレンチを設定した。Bトレンチは東西8m、幅1mの範囲である。石笠状石器の未完成品が1点出土している。Cトレンチは今回の調査区で最も広い範囲の地区で8m×4mを設定した。

この場所は木の切り株もなく、調査がしやすい現況であったからである。9月中旬ごろまでにこれらの調査区を終了し、D・Eの順で調査を進めた。D地点は舌状に延べる地形の突端部にあたる。その直下がF地点であり、図版12の写真でもわかるようにA～E地点の登り口の場所で、削平した土層から土器片がまとめて認められた。9月30日までに終了した。

3 検出遺構

土壌10基、溝状遺構1基、ピット2基が認められた。Cトレンチに多く遺構が集中する状況であった。土壌は自然堆積状況を呈するものが大半である。各トレンチごとに説明したい。

A トレンチ [第38図]

K Y 2・F Y 1の2基の遺構が認められた。K Y 2は東西に延びる溝状遺構で幅1.3m、深さは50cmを測る。底面から河原石1個が出土している。人工的に掘られた遺構と考えられる。

F Y 1は覆土の状況から風割木坑と考えられる。Aトレンチからの遺物は剥片を中心に58点出土している。内訳はフレーク31点、チップ8点、土器片19点となる。

B トレンチ [第39図]

遺構は検出されなかった。遺物は245点出土している。石籠状石器1点、フレーク107点、チップ109点、石核4点、土器片22点が出土した。

C トレンチ [第40図]

土壌6基が検出され、そのうち3基を完掘した。D Y 3は長径2.1m、短径1.5mの長円形を呈する土壌であり、深さは50cmある。覆土からはフレーク9点、チップ10点、土器片2点が出土している。繊維を含むことから縄文前期初頭に位置づけられる。色調は明褐色で胎土に大粒の小石を含む。焼成は良好である。底部に近い破片と推測され、底部は尖底の可能性もある。撲糸文土器片で本市では小野川町の塔ノ原遺跡に類例がある。

D Y 7・14は円形状を呈する浅い土壌であり、D Y 14には疊が中央におかれていた。両者と遺物は認められなかった。半裁したD Y 8・9・12がある。D Y 12には深さ1.1mの幅のせまい掘り方から判断して落とし穴の可能性がある。覆土からはフレーク15点、チップ23点、土器片が9点出土している。D Y 8・9はD Y 8がD Y 9を掘り込んでいる。覆土に黒色土を多量に含むことから比較的新しい土壌とD Y 8は考えられる。遺物はフレーク3点、チップが10点出土しているが周辺から流れこんだと推測したい。D Y 9はD Y 8に削平されている。深さは10cmと浅い。遺物としてはフレーク8点、チップ52点、土器1点が出土している。

トレンチからの出土遺物としては石籠状石器1点、小形石籠状石器1点、スクレーパー類2点、接合石器1点、石匙未完成1点が認められた。土器も細沈線の縄文早期土器片2点が出土している。

C区は表土から30cm掘り下げた地点で遺物は認められなくなった。黒点で示したのは表土10～20cmの出土状況である。これ以下から遺物が出土する可能性もあるが今回はこの時点で終了した。赤褐色粘土層はボーリング調査によると約1mは続く。

D トレンチ [第41図]

D Y 14・P Y 5・10の3基を確認した。D Y 14は長径1.1m、短径0.9mの楕円形状を呈する平面プランで深さは最深で40cmを測る。覆土からはフレーク5点、チップ5点が出土した。ピットのD Y 5・10は長径30cm位の円形を呈する平面形状で深さ30cmを測る。P Y 5から土器片1点が出土している。DトレンチからはB Z 6と示した同一母岩からの剥片が集中した状態で確認された。近くからは使用痕があるサイドスクレーパー1点が出土している。

Eトレント [第41図]

山頂部に配したトレントの中でもっとも東南に位置する。位置図からわかるように舌状に張り出す突端部にある。4m×4mの範囲で掘り下がった。深さは5cm位で遺物が出土する状況であった。黒点で示した箇所が遺物出土点であり、密度の濃い出土状況を呈する。

A Z18は落葉を除去するとすぐに出土する状況であった。外面がススが付着しているため黒色であり、薄形の土器で焼成も良好である。縄文を施文していることから縄文土器と認識できたが一見すると中世の瓦器質土器と類似している。遺構としてはD Y13がある。長円形の平面形状であり、長径1.4m、短径0.9mを測る。深さは最深で50cmあり、覆土からは同一母岩から剥離されたフレーク29点、チップ79点が出土している。母岩は剥片の観察から3個体を使用している。

Fトレント [第39図]

舌状台地直下の地点で図版12を参照願いたい。林道が台地を横切るように走ることから地層を観察するには良い場所であった。林道工事によってD Y11の北方部分が削平された状況で土器片が散乱していた。出土土器は縄文前期初頭の土器片であり、出土状況から判断して一括土器であった可能性が高い。

当初、竪穴住居跡との期待もあったが試掘の結果、土壤と判明した。Fトレントの上面は活動層であったことから出土点は示さなかった。石錐、スクレーパーが出土している。出土点は前述の理由から本来の箇所とはちがう可能性があることを付け加えておきたい。

4 検出遺物 [第42~44図]

今回の調査によって総数1,787点の遺物が出土している。大別すると剥片が最も多く1,550点、石核5点、石器15点、土器229点であった。これらの遺物は伴出土器から縄文時代早期から前期に位置づけられる石器群である。細別して説明したい。

○出土土器 [第42図]

FトレントのD Y11からの出土数が多く85点、Cトレント24点、Bトレント22点、Aトレント19点等であった。小破片が大半で、復元できた土器は認められなかった。図示した土器を中心的にA類からC類の3形態に細類して説明したい。

○A類土器 [第42図1]

CトレントのD Y3周辺から2点出土している。表土から20cmの深さである地点からの出土であった。赤褐色を呈する薄形で胎土に石英砂を少々含み、焼成は良好である。二条の斜位と横位の沈線で文様を構成する細沈線文土器のグループである。

縄文早期中葉に位置づけられ、桑山遺跡群NO.5の二夕侯A遺跡のIV期と併行する。田戸上層、大寺、常世、子母口式に併行すると考えられる。

○B群土器 [第42図2~10]

D Y11から出土の土器とD Y3出土の2形態が認められる。D Y11出土の土器群は口縁部片であり、波状を呈する口縁部形態を有する。胎土に纖維を含む特徴から縄文前期初頭に位置づ

けられる。

同図9・10も繊維を含む胎土で撲糸文を施している土器片である。縄文早期末葉と縄文前期初頭をつなぐ土器として位置づけたい。

◎C群土器 [第42図11]

舌状台地の突端部Eトレントから出土した土器である。結束縄文を押圧した文様であり、内面はヘラミガキ調整によって丹念に仕上げている。胎土にはやや大粒の石英砂を混合しているのが観察できる。縄文前期大木4式併行土器と考えられる。桑山遺跡群に出土例がある。

◎出土石器 [第43図 第44図]

石鎧状石器7点、欠損面を有する石器3点、削器（スクレーパー）3点、石錐1点、接合石器1点、石核8点が出土している。細別して説明したい。

I群石器 [第43図1～6・8]

使用痕を有する2・4があり、使用縁辺を完線で示した。基部の実線は柄着装痕を示す。6は製作丹念品、8は製作失敗品と推測される。3は使用痕の観察から削器となるが刃部の形態から石鎧状石器に分類した。

II群石器 [第43図7 第44図10・11]

石器製作の過程において、失敗した石器群である。7は小形石鎧状石器の失敗品であろう。10は石匙の失敗品で出土した部分はつまみ部と考えられる。11は尖状を呈する両面調整の石器で石槍の失敗品であろう。10・11については本市の一ノ坂遺跡から出土している石器の形態に類似している。ちなみに一ノ坂遺跡は各工程の石器形態が出土したことで注目され、従来の分類に加え、一ノ坂の資料を照合することによって、より明確な分類が可能になった。

◎石錐 [第44図9]

つまみ部と錐部を整形した石錐である。つまみ部縁に磨滅痕が認められ、剥片を再利用して製作された石錐といえる。

◎接合石器 [第44図14]

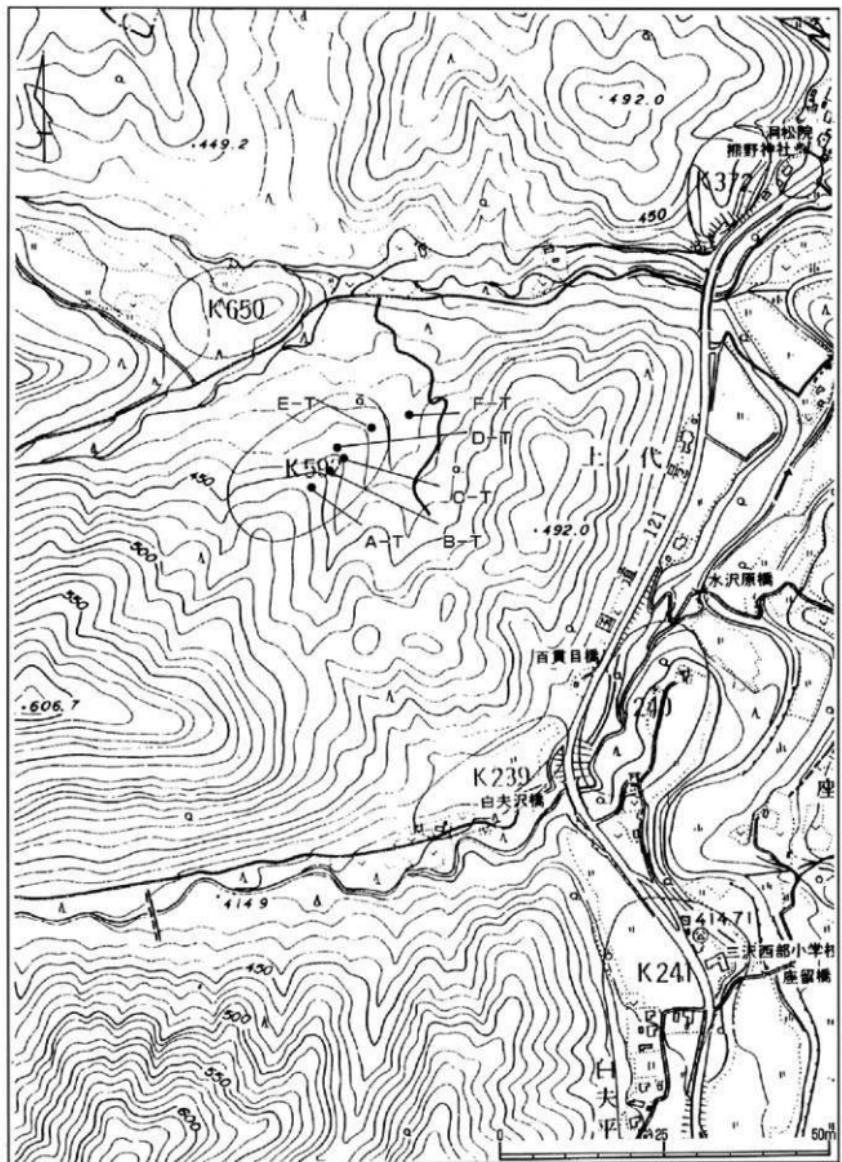
製作途上で失敗して廃棄された剥片である。この他にも同一母岩と観察できる剥片のグループは25個体分である。接合したのはこの1点だけであった。

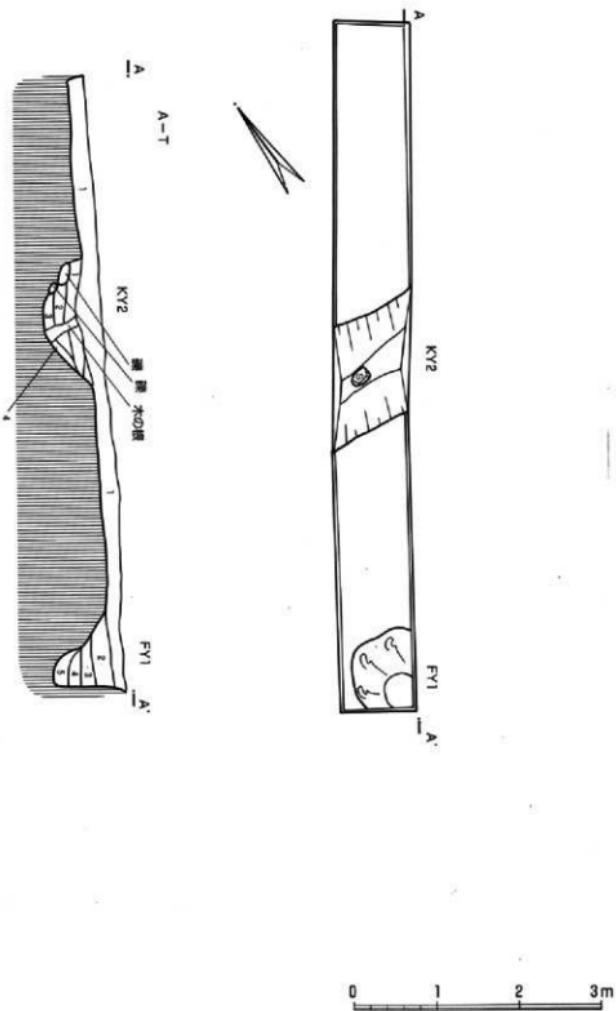
◎削器 [第44図12・13・15]

13・15に使用痕が観察できる。石器製作の他にも作業をしていることがうかがえる。使用痕を有する石器は石鎧状石器等にもあり、生活の場であったことを示している。

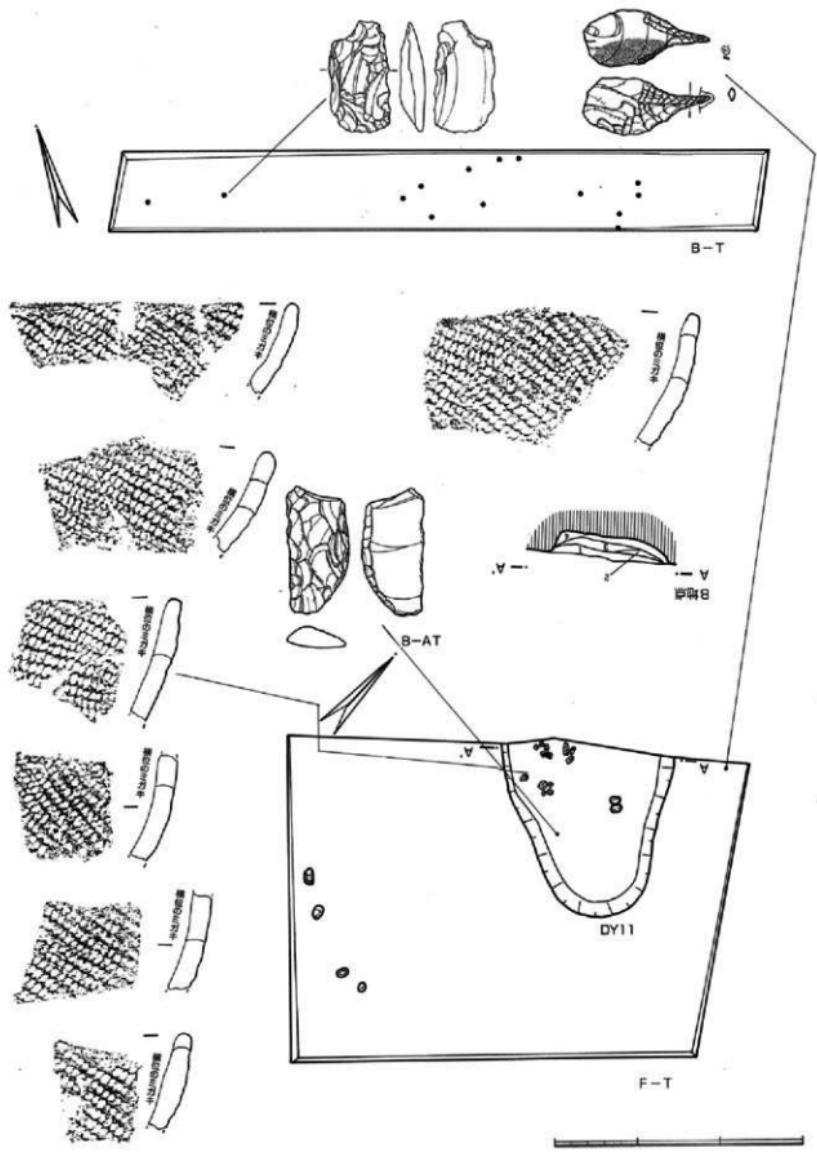
5 まとめ

今回の調査の目的は、石器石材供給地の解明であった。母岩から剥離して第I工程段階で各遺跡に運搬したと仮定した。しかし出土したのはフレークやチップで占められ、石材を供給したと結論づける証拠は見出だせなかった。しかし、石匙や石槍の失敗品は一ノ坂遺跡出土の石器に類似するものであり、関連性がうかがえる資料であった。試掘箇所が小範囲であり、まだ結論がでたわけではない。

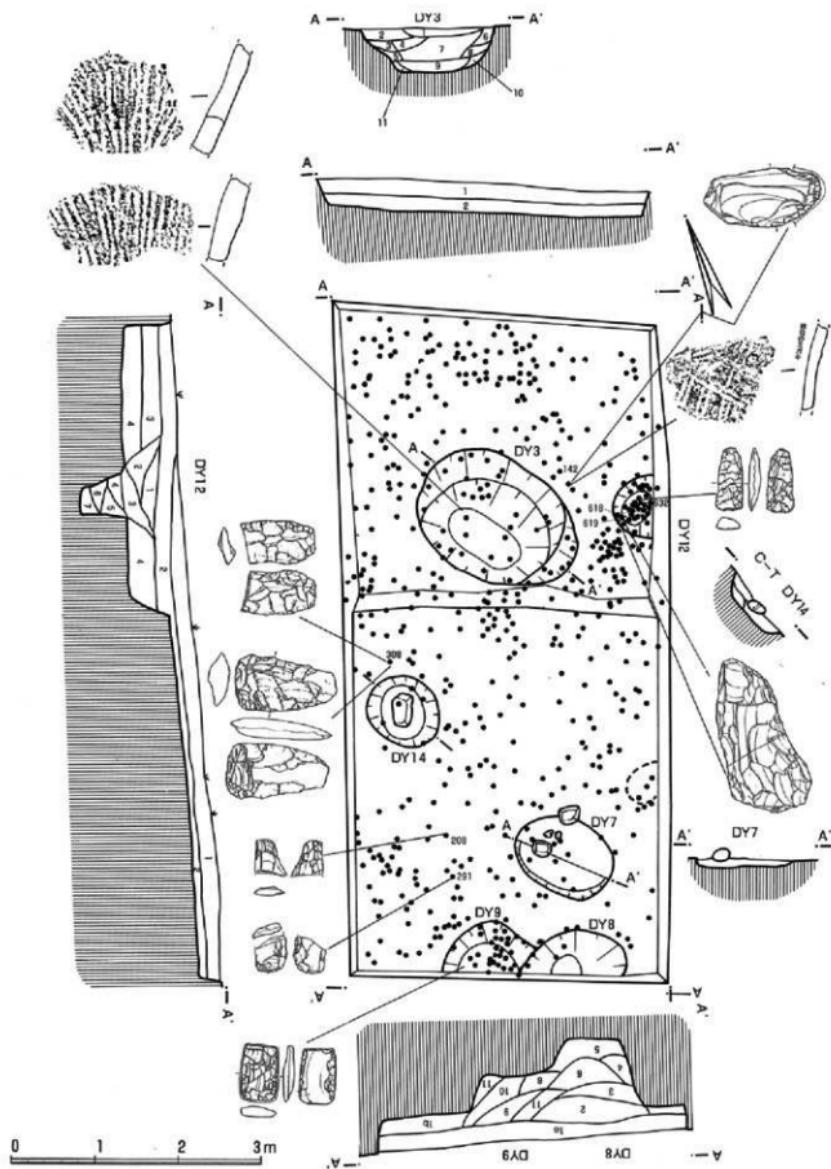




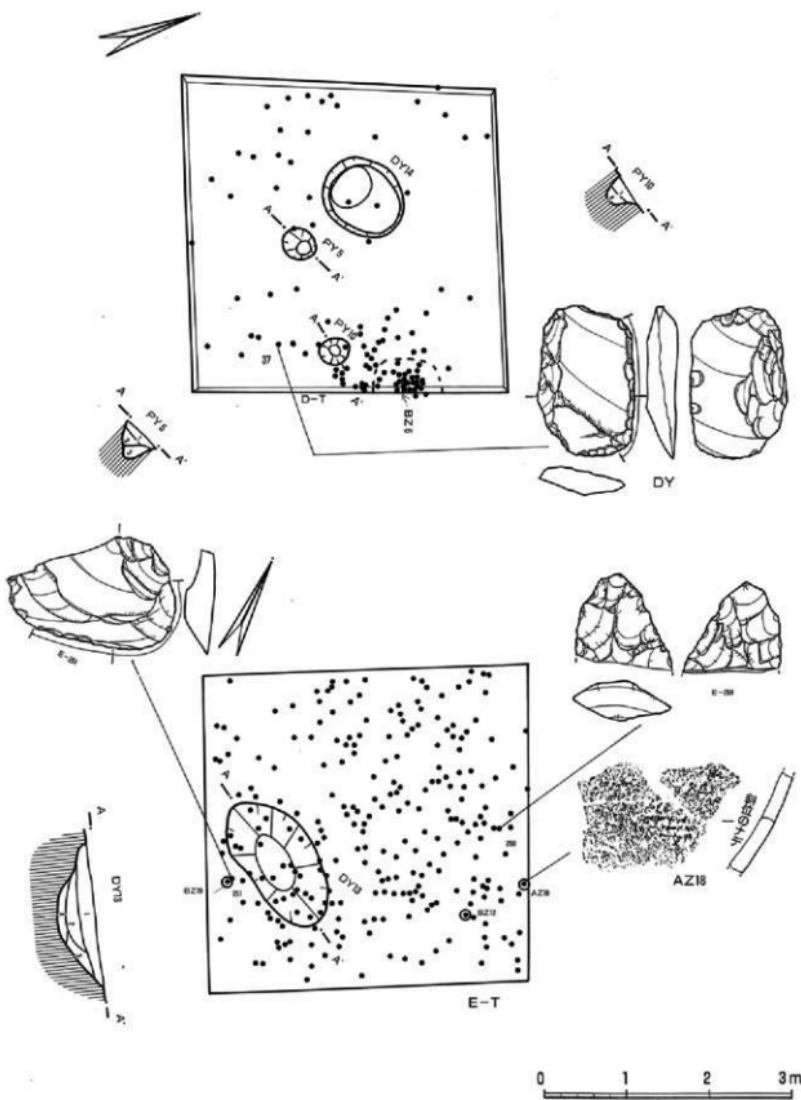
第38図 臨之沢遺跡A トレンチ平面図(1)



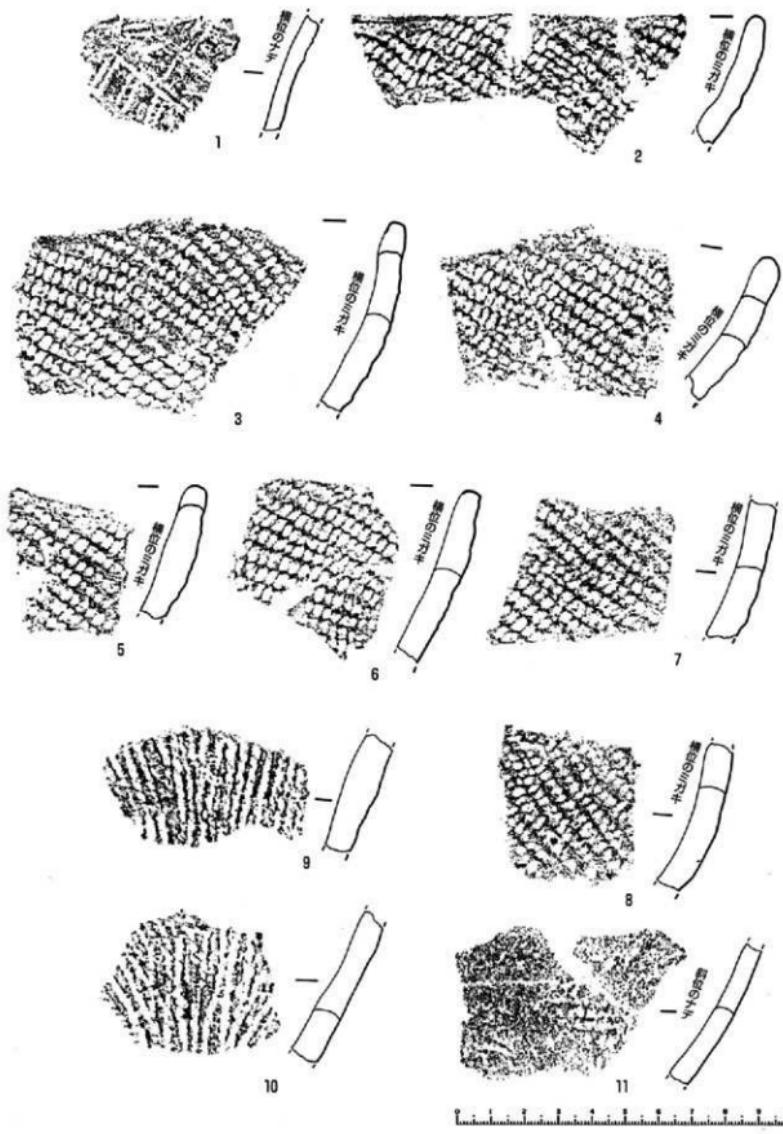
第39図 諏之沢遺跡B・Fトレンチ平面図(2)



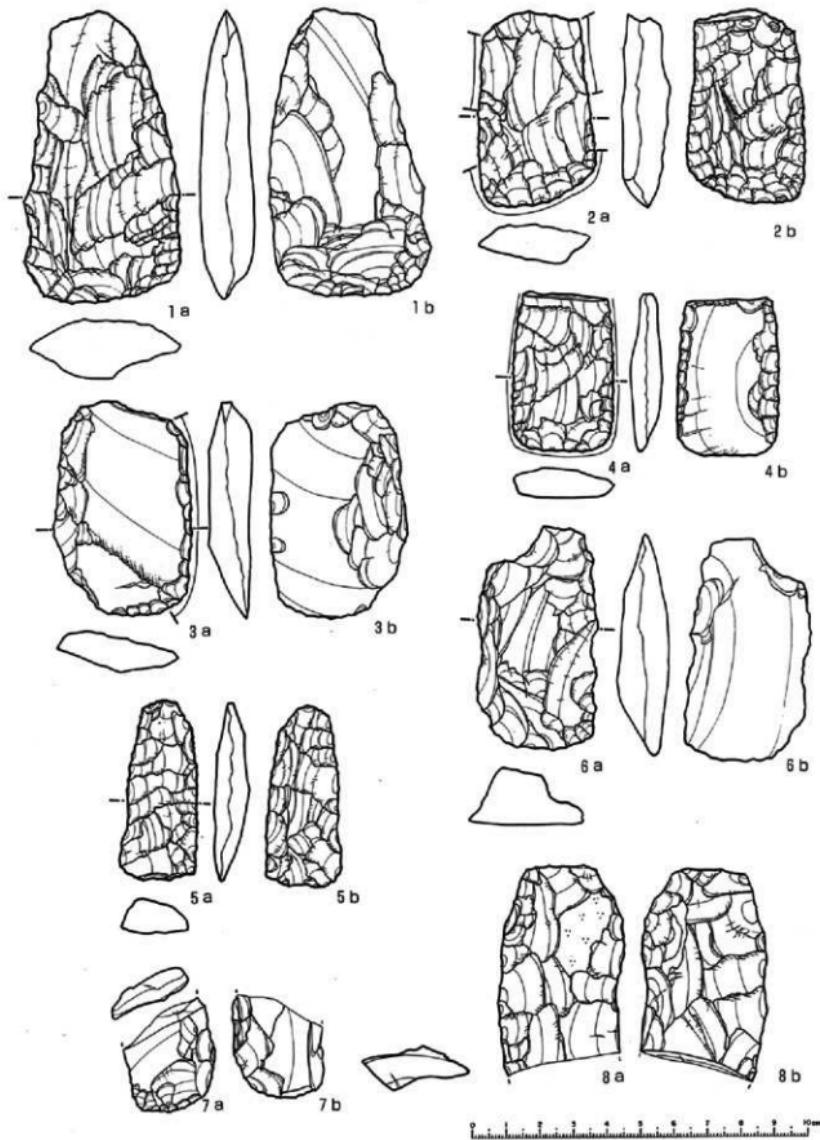
第40図 脇之沢遺跡Cトレーニチ平面図(3)



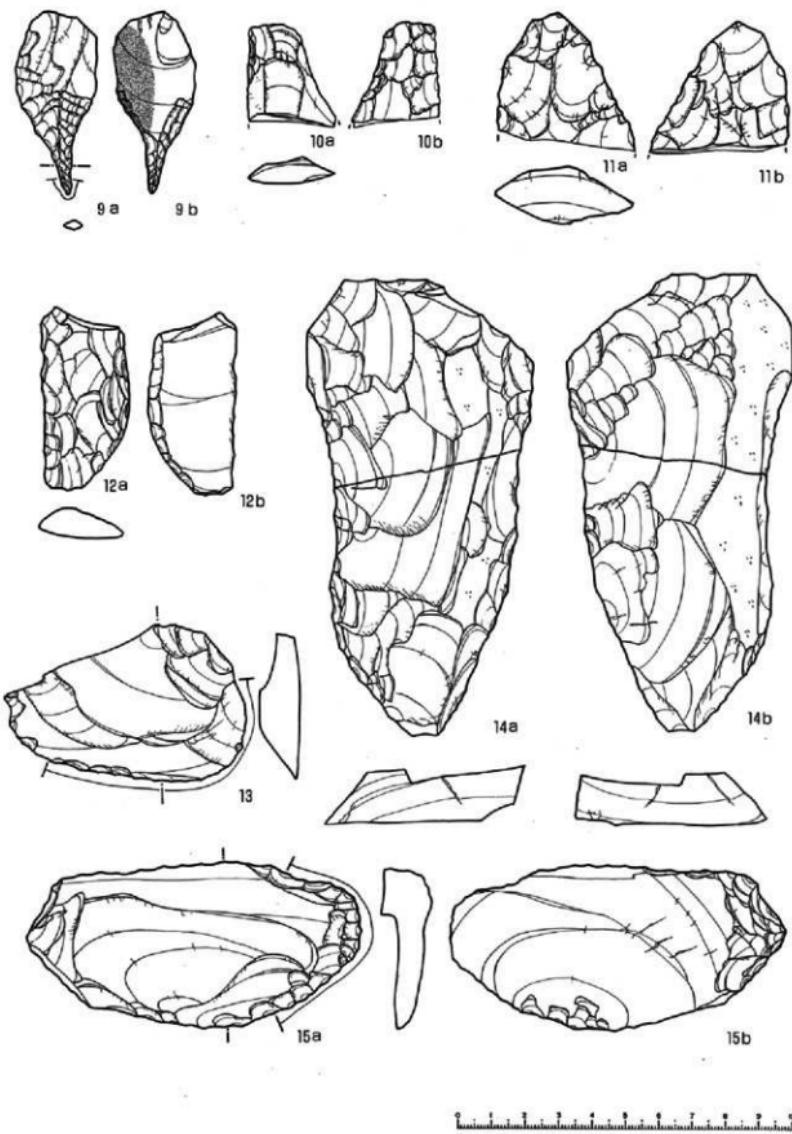
第41図 脇之沢遺跡口・Eトレンチ平面図(4)



第42図 脇之沢遺跡出土土器拓影図



第43図 脇之沢遺跡出土石器実測図(1)



第44図 藩之沢遺跡出土石器実測図(2)

第IV節 古志田東遺跡

1 遺跡の概要

古志田東遺跡は米沢盆地の南西に位置し、JR米坂線南米沢駅北西約1kmの古志田地内（新住居表示により現在は林泉寺三丁目地内）に所在する。

地形的には遺跡の南西側が、斜平山山麓から延びる台地を、旧松川の侵食によって形成された河岸段丘が発達している。段丘直下の東側一帯は緩やかな平坦地が広がっており、遺跡はその標高約260mの水田地帯に遺在する。遺跡の西方約1kmには縄文時代の古志田遺跡、桜神社遺跡や中世期の笹野館跡等が河岸段丘上に沿って分布している。

当遺跡付近の河岸段丘の低い平坦地における水田一帯には、遺跡の存在は確認されておらず遺跡の空白地と考えられていた。今回の古志田東遺跡の発見は、平坦地内にも遺跡が存在することを具体的に示すものであり、遺跡包蔵地の未確認地域における分布調査の必要性を指摘する結果となった。

2 調査の経過

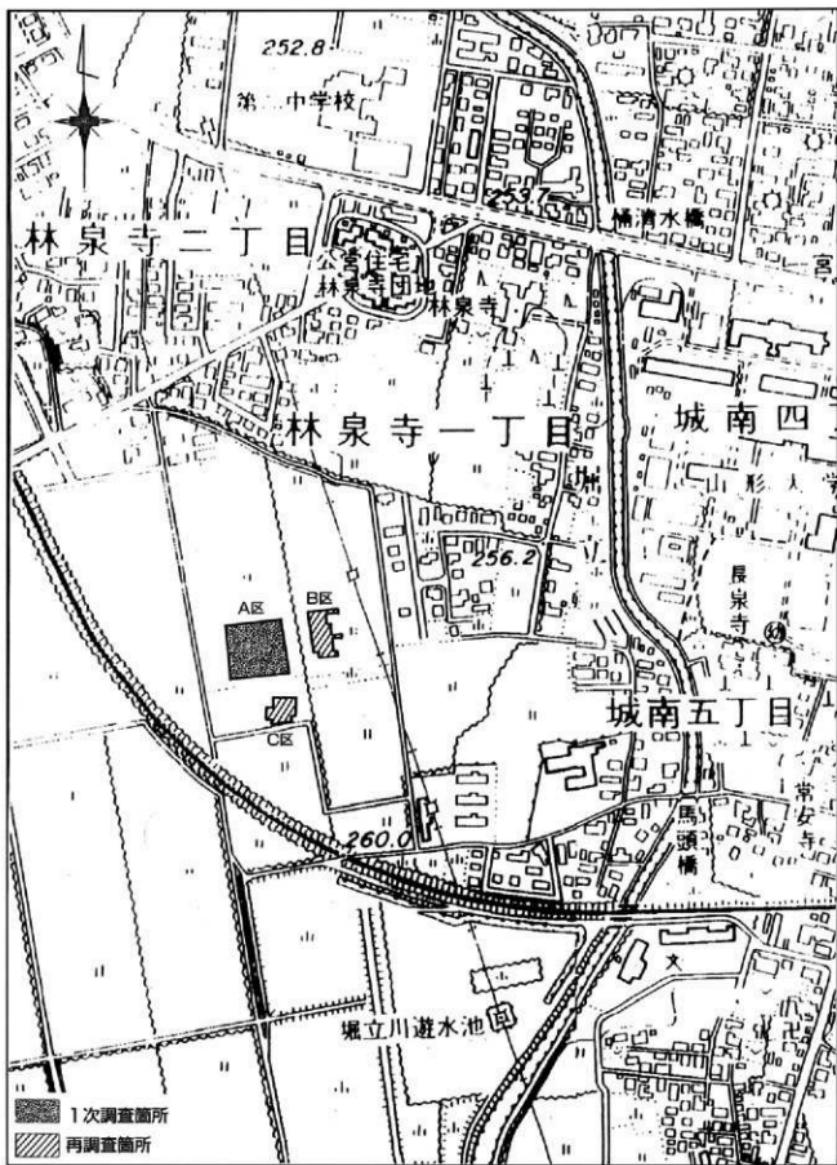
当遺跡は、平成11年度に開発者が宅地造成事業として、古志田町の分譲地（87,455m²）を計画したのを受けて、本市教育委員会が試掘調査を実施した際に、新規遺跡として発見されたものである。当初は、特に遺物が密集する東西約56m、南北約55mの範囲を調査区と判断し、開発者と協議の上、発掘調査に至った。しかし、発掘調査を進めることによって3面庇を伴う3間×10間の大型建物跡をはじめとする4棟の掘立建物跡群や、河川跡からは木簡約30点余りを含む木製品や、赤焼土器を主として遺物が多量に出土し、県内でも類例のない遺跡であることが判明した。

以上のことから、遺跡が予想以上に広がってる可能性が指摘され、開発者と再度協議を行い遺跡範囲と、遺構の密集範囲をより詳細に把握するための再試掘調査を平成11年10月1日～同年10月22日に実施した。

再調査は初回に遺跡範囲と推定した東側と南側部分を重点に実施した結果、東西85m、南北約90mの広範囲（約7,600m²）に遺存することが判明し、初回に調査した東及び南側部分の2箇所、計1,230m²の調査を実施したものである。便宜上、初回に遺跡範囲と推定した部分をA区、東側をB区、南側部分をC区と呼称した。A区を含めた古志田東遺跡全体についての報告は平成12年度に刊行する予定であることから、ここでの報告は再調査を実施したB区及びC区の主な遺構についてのみにとどめる。

3 検出遺構

今回の調査で検出された遺構には、掘立建物跡3棟、溝跡2条、土壙2基等がある。検出遺構は保存を前提にしたことから、半裁等の掘り下げは柱穴、土壙、溝跡のそれぞれ1基のみ行った。出土土器は赤焼土器が主であり、他に須恵器、土師器等が整理箱で3箱ある。以下、



第45図 古志田東遺跡調査区位置図 (S=1:5000)

掘立建物跡 3 棟、土壙 1 基、溝跡 1 条についてその概要を述べる。

「掘立建物跡」

BY 5 建物跡 A 調査区北東側の壁側で確認された、東西 2 間（梁行）×南北 3 間（桁行）の建物跡である。柱穴の平面形はほとんどが隅丸方形を呈し、柱間は 0.9~1.2m、柱穴の長短径 40~55cm を測る。柱穴 TY 102~105, 108 には柱痕が確認された。重複関係は 3 柱穴で確認され、TY 104 が~112 を、TY 105 が~113 をそれぞれ切っており、TY 106 が 114 に切られている。

BY 6 建物跡 A 調査区南側の壁側で確認された、東西 6 間（桁行）×南北 3 間（梁行）の建物跡である。柱穴の平面形は隅丸方形及び楕円形を呈し、柱間は 1.2m 前後、柱穴の長短径は 36~56cm を測る。柱穴 TY 130, 122, 125, 127, 130 には柱根が、また他の柱穴すべてに約 15cm の柱痕が確認された。重複関係は柱穴で唯一掘り下げを行った TY 128 が 131 に切られている。なお、西側の梁行 TY 115 と 116 の間には、新設の電柱が立っていることから柱穴は未確認であるが、東側で確認されていることから遺存するものと判断される。

BY 7 建物跡 B 調査区南側で確認された、東西 5 間（桁行）×南北 3 間（梁行）の建物跡である。柱穴は北側桁行、TY 134, 136~140 及び、南側では南列桁行に位置する TY 135 のみの確認である。柱穴の平面形は隅丸方形及び楕円形を呈し、柱間は 0.9~1.2m、柱穴の長短径 36~58cm を測る。TY 134 には柱根片 1 基が、また TY 135, 139 柱穴に 15~20cm の柱痕が確認された。重複関係は TY 137 が 141 を切り、TY 138 が 142 に切られている。

「土壙」

DY 236 土壙 A 調査区北側の BY 5 西側で確認された。平面形は概ね方形を呈し、長短径 95~112cm を測る。掘り方は底部が平坦で、底部から垂直に近く掘り込んでおり、土層は 2 層に確認された。深さは確認長で 17cm と極めて浅い。出土遺物は須恵器、赤焼土器片が数点あり、双方とも器形は底部が小さく器高が高く口縁部がやや外反し、底部切離しが糸切りの特徴から、9 世紀中葉~10 世紀初頭と判断される。

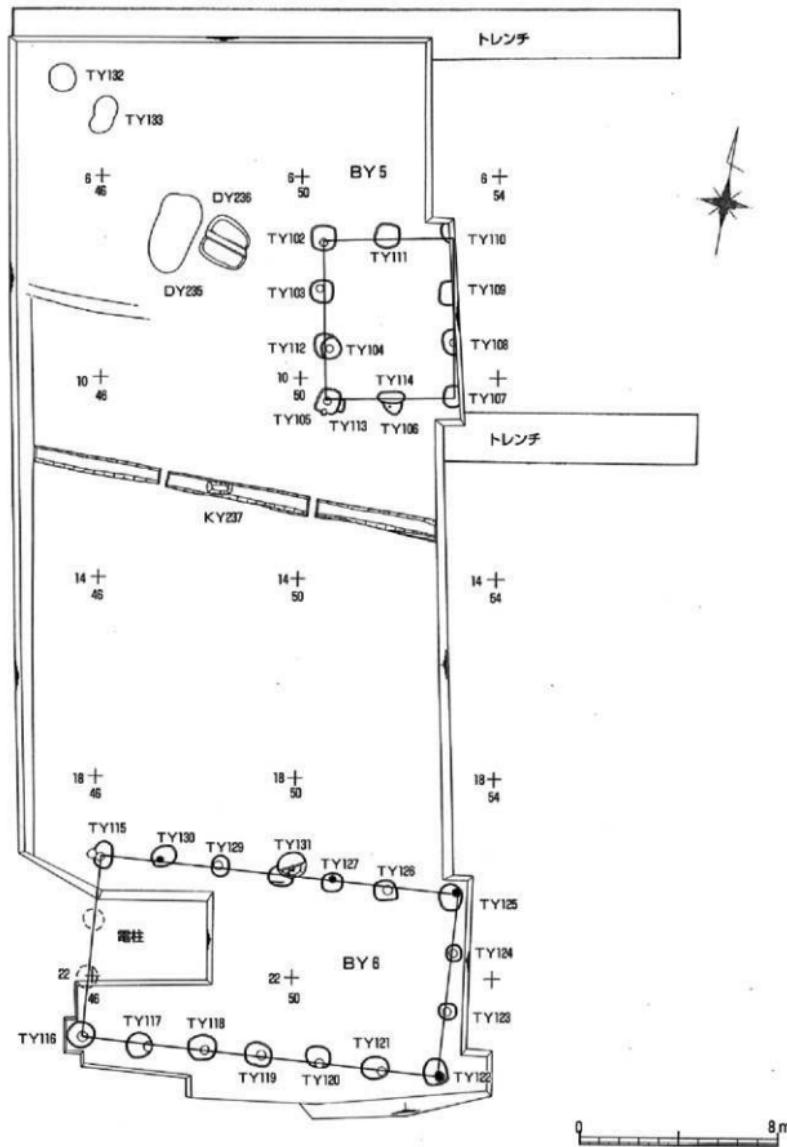
「溝跡」

KY 237 溝跡 A 調査区の中央部に、東西方向で直線状に確認された。幅 35~40cm、深さ確認長で 20cm 前後を測る。土層は 2 層に確認された。溝跡上部及び底部から遺物が出土しており、須恵器、赤焼土器が数点あり、DY 236 出土同様、9 世紀中葉~10 世紀初頭と判断される。

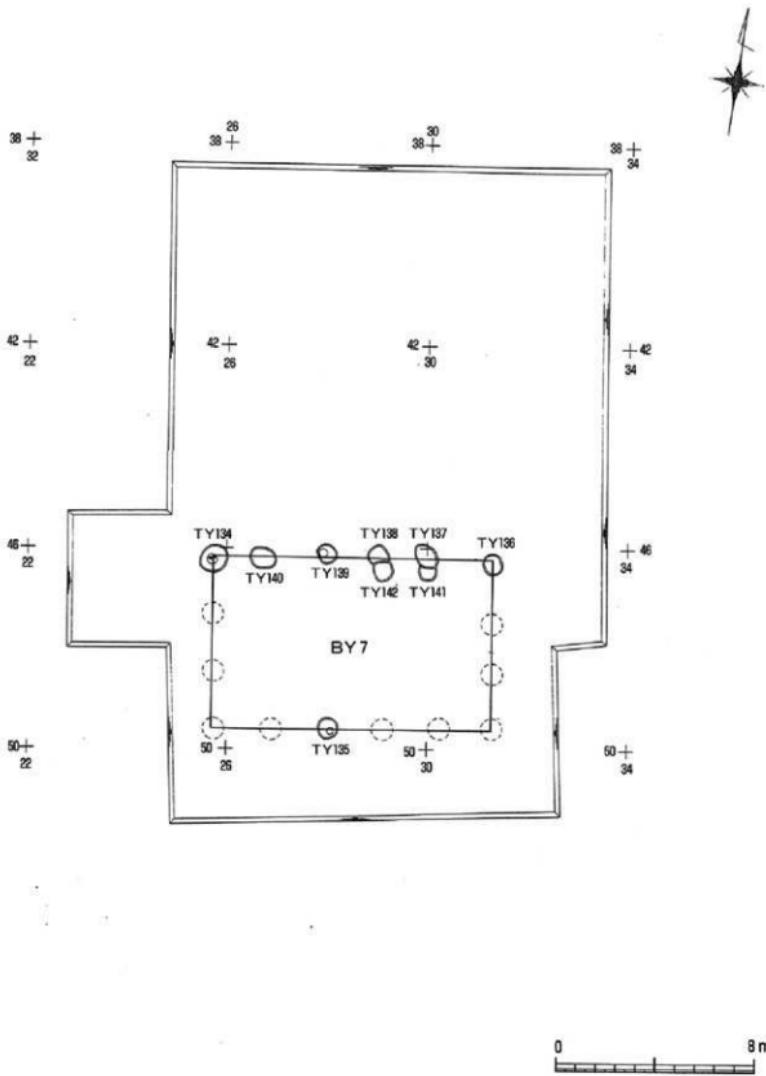
3まとめ

今回の調査は前述のように、初回に調査した東側及び南側部分の 2 箇所、計 1,230m² の小範囲の調査を実施したものである。古志田東遺跡全体についての報告は平成 12 年度に刊行する予定であることから、ここでの報告は再調査を実施した主な遺構についてのみにとどめた。遺跡の年代は、出土土器の特徴から 9 世紀中葉~10 世紀初頭と判断される。

遺跡の性格としては、A 調査区の河川跡から約 30 点余りの木簡が出土しており、その木簡の内容から、地方の豪族や有力者層に関わる居館跡と判断される。



第46図 B調査区遺構全体図



第47図 C調査区遺構全体図

参考文献

- 1976 手塚 孝他 米沢市八幡原中核工業団地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書 第2集 米沢市教育委員会
地域振興整備公団
八幡原中核工業団地内遺跡調査団編著
- 1983 手塚 孝 菊地政信 米沢市埋蔵文化財調査報告書第8集
米沢市万世町桑山田地造成地内 埋蔵文化財報告書 第II集
二夕侯A遺跡
八幡堂遺跡
米沢市教育委員会
- 1985 手塚 孝他 米沢市埋蔵文化財調査報告書第12集 法将寺
米沢市教育委員会
- 1984 菊地政信 米沢市埋蔵文化財調査報告書第43集 塔ノ原
米沢市教育委員会
- 1996 手塚 孝 菊地政信 米沢市埋蔵文化財調査報告書第53集 一ノ坂
米沢市教育委員会

報告書抄録

ふりがな 書名	いせきしょうさいぶんぶちょうさほうこくしょ 遺跡詳細分布調査報告書							
副書名								
卷次	第12集							
シリーズ名	米沢市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第70集							
編著者名	菊地政信・月山隆弘							
編集機関	米沢市教育委員会							
所在地	〒992-0012 山形県米沢市金池三丁目1番55号							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東緯	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
市町村	遺跡番号	北緯	東緯	調査期間	調査面積 m ²	調査原因		
台ノ上遺跡	山形県米沢市 吾妻町地内	6202	E-222	37度 53分 30秒	140度 07分 28秒	19990506 ~ 19990518	200	宅地造成
脇之沢遺跡	山形県米沢市 大字入田沢地 内	6202	K-592	37度 分 秒	140度 分 秒	19990823 ~ 19990930	100	確認調査
古志田東遺跡	山形県米沢市 林泉寺三丁目 地内	6202	E-695	37度 53分 41秒	140度 分 秒	19990823 ~ 19990930	1,230	確認調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
台ノ上遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居土壙	縄文土器石器	縄文時代(中期)の大集落跡			
脇之沢遺跡	集落跡	縄文時代	土壤	土器・石器				
古志田東遺跡	集落跡	平安時代	掘立建物跡・ 土壙	土師器・須恵器 赤焼土器	置賜郡の有力 な豪族屋敷と 推定される			

写 真 図 版



▲ プラン確認状況（南方から）



▲ プラン確認状況（北方から）



▲ 遺構全景（北方から）



▲ HY14掘り下げ状況（西方から）



▲ HY14土器出土状況（南方から）



▲ HY14掘り下げ状況（東方から）



▲ HY14近景（北方から）



▲ HY14掘り下げ状況（北東から）



▲ 埋設土器 (MY10) 出土状況 (南方から)



▲ DY 6 半裁状況 (北方から)



▲ HY10セクション状況 (南から)



▲ 埋設土器 (MY10) 近景 (南西から)



▲ 磨製石斧出土状況 (南方から)



▲ 土偶出土状況 (南西から)



▲ 現地説明会風景 (北方から)



▲ HY 3 近景 (西方から)

図版三 台ノ上遺跡第六次調査



▲台ノ上遺跡第六次調査区全景（南方から）



▲台ノ上遺跡第六次調査HY14遺物出土状況（南方から）

図版三 台ノ上遺跡第六次調査

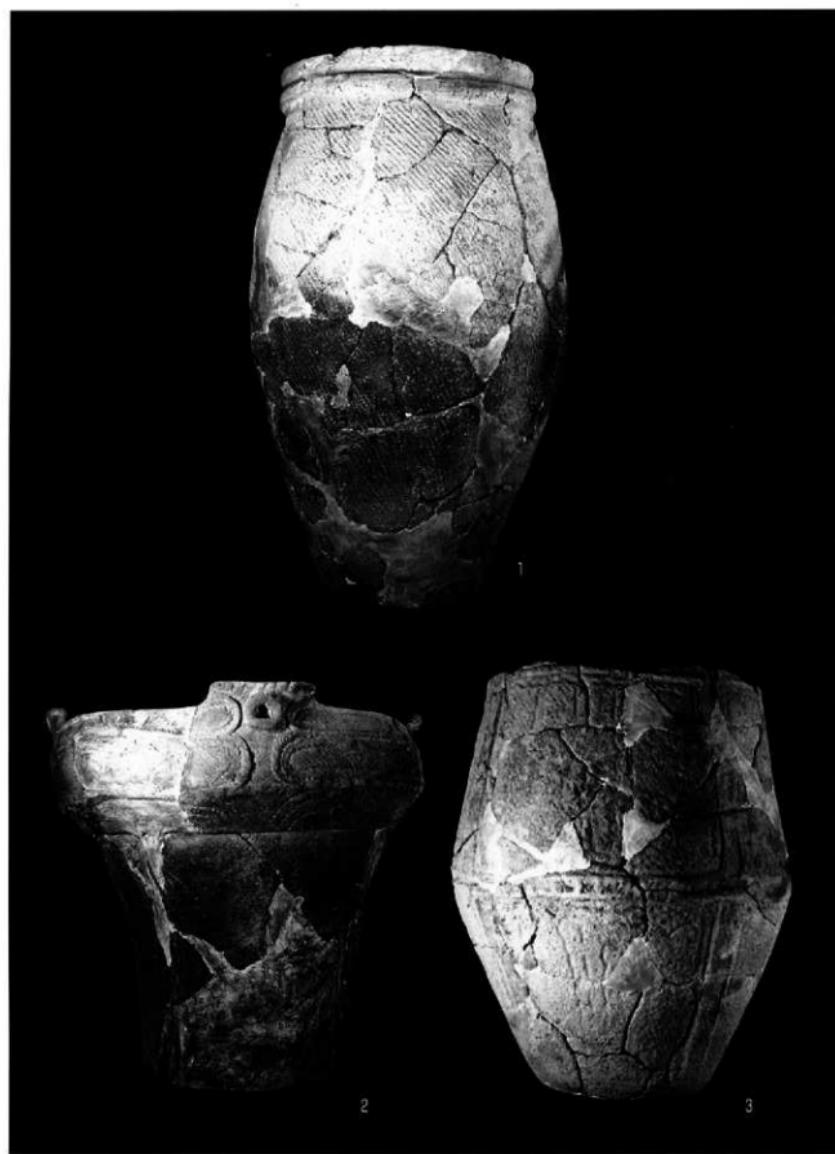


▲台ノ上遺跡第六次調査区全景（南方から）



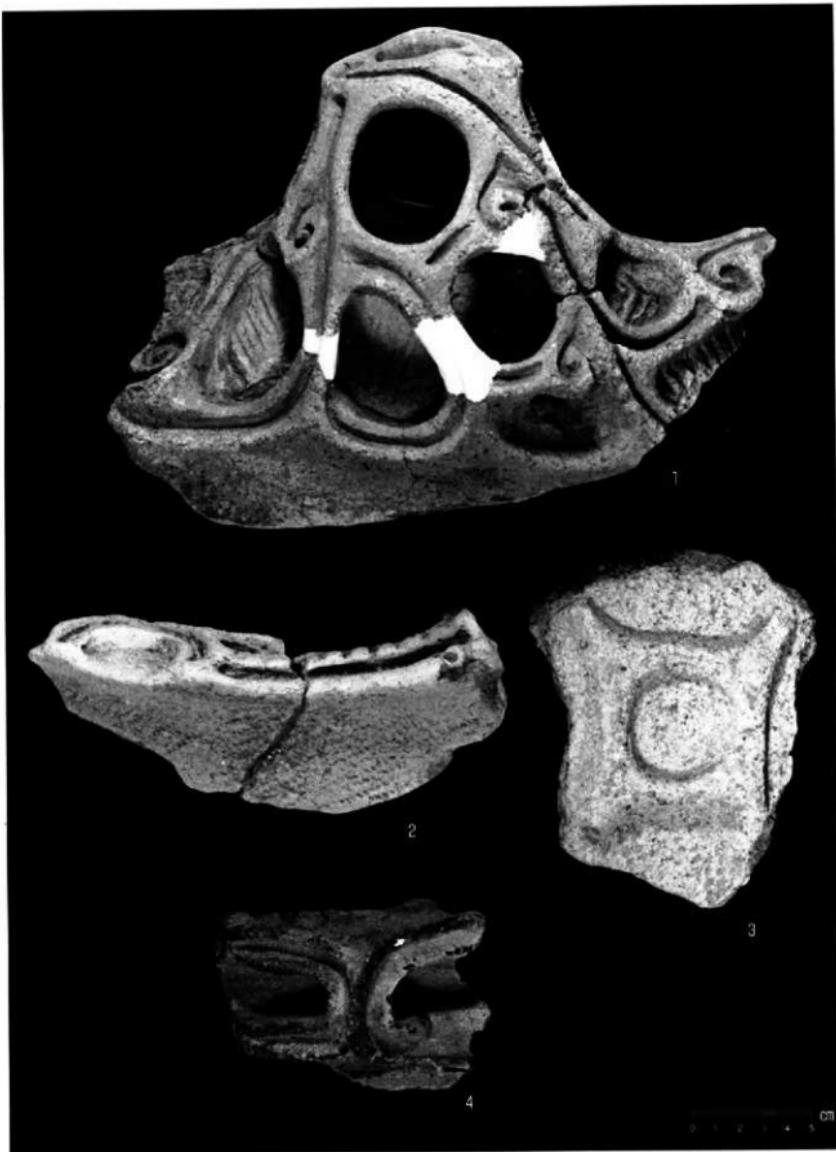
▲台ノ上遺跡第六次調査HY14遺物出土状況（南方から）

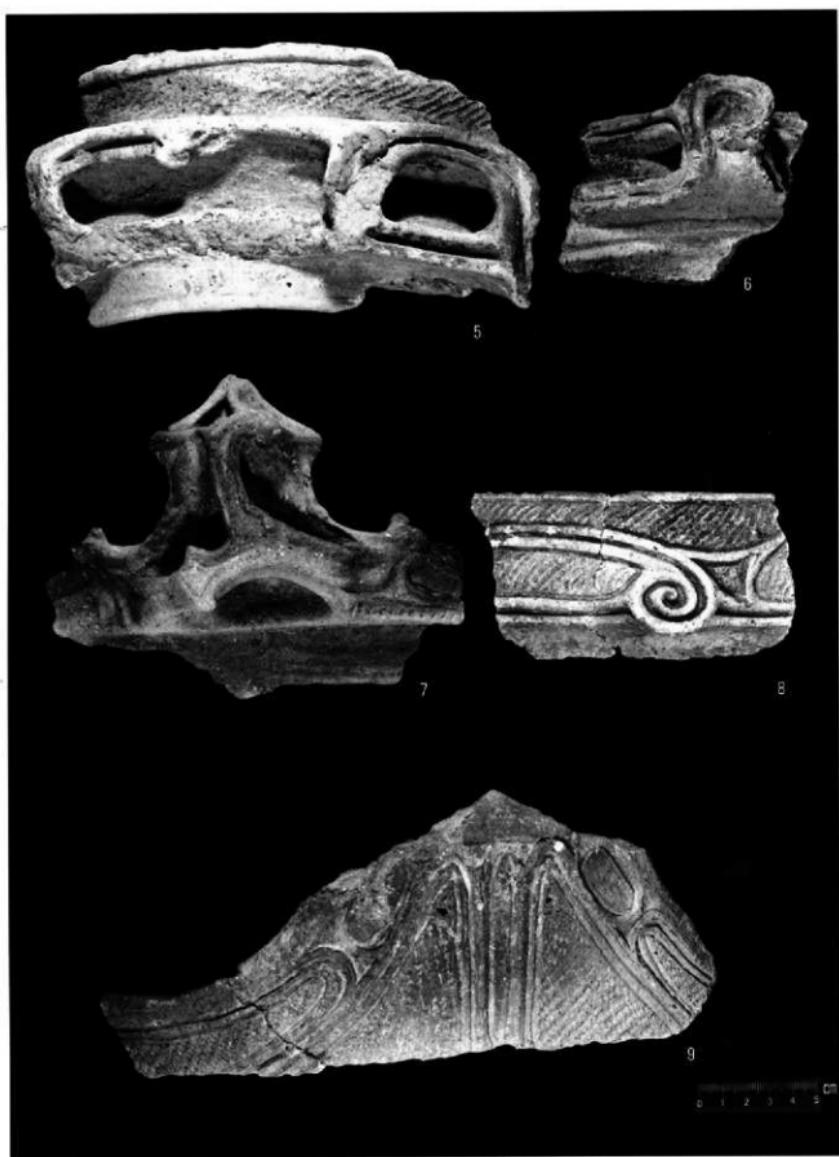
圖版四 台ノ上遺跡第六次調査

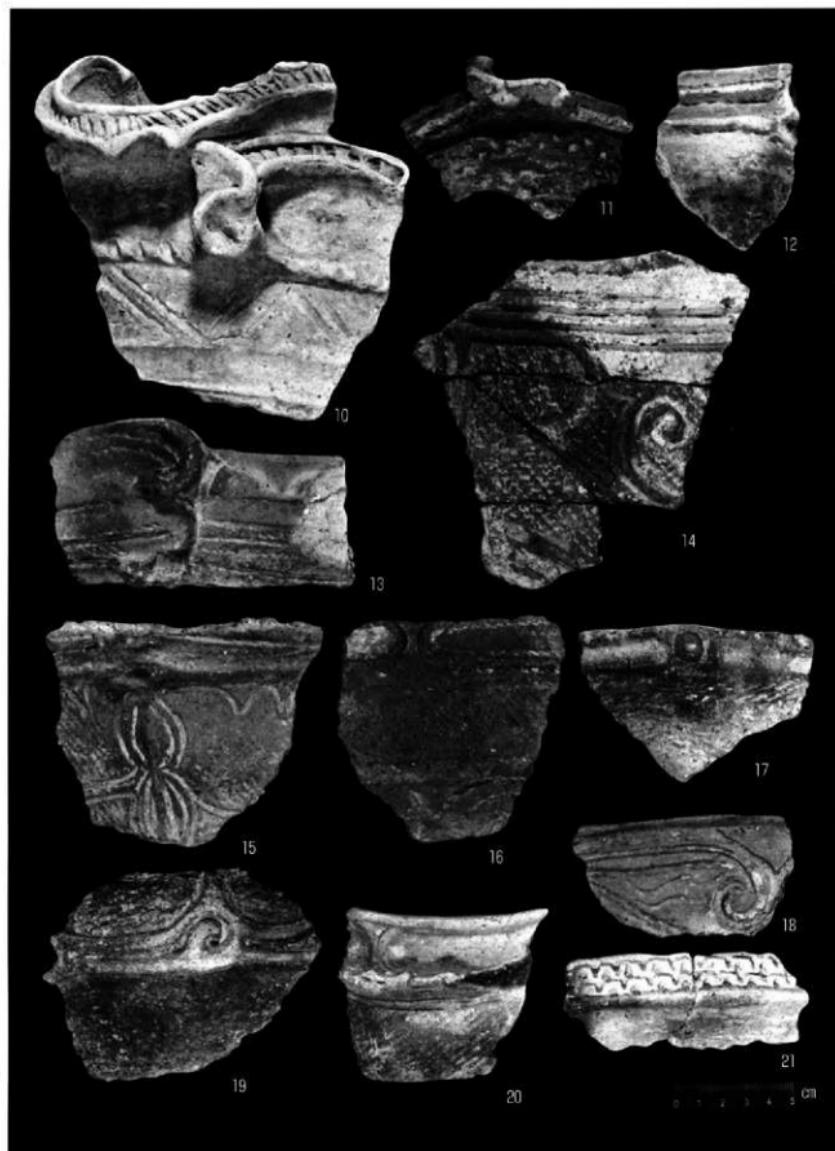


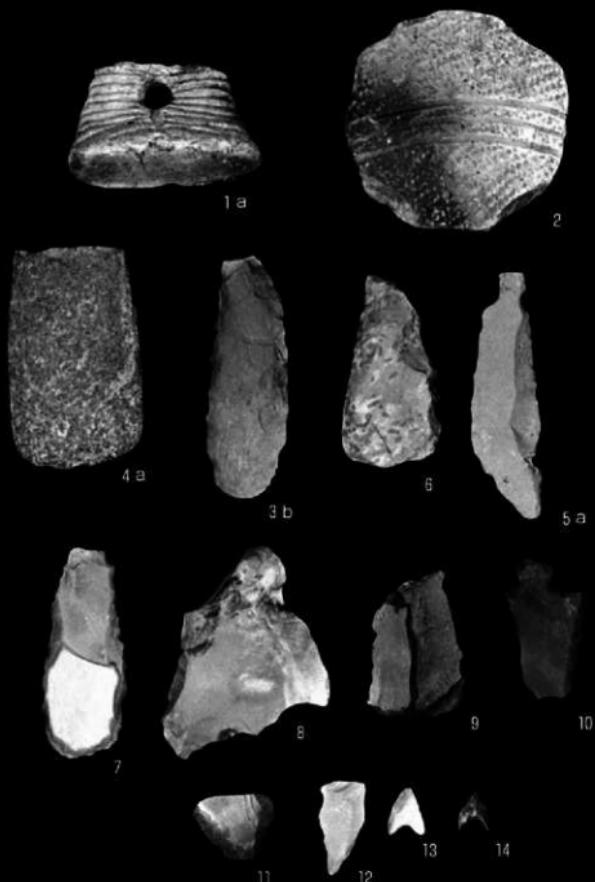
出土復元土器













出土凹石 石皿 磨石

圖版十一 台ノ上遺跡第六次調査



出土石棒



▲ Fトレンチ調査風景（東方から）



▲ Fトレンチ調査風景近景（南東から）



▲ Cトレンチ全景（南東から）



▲ Cトレンチ全景（南東から）

図版十四 路之沢遺跡の調査



▲ Fトレンチ土器出土状況（南方から）



▲ Fトレンチ完掘状況（北方から）



▲ C区DY 8半截状況（南方から）



▲ C区DY12半截状況（西方から）

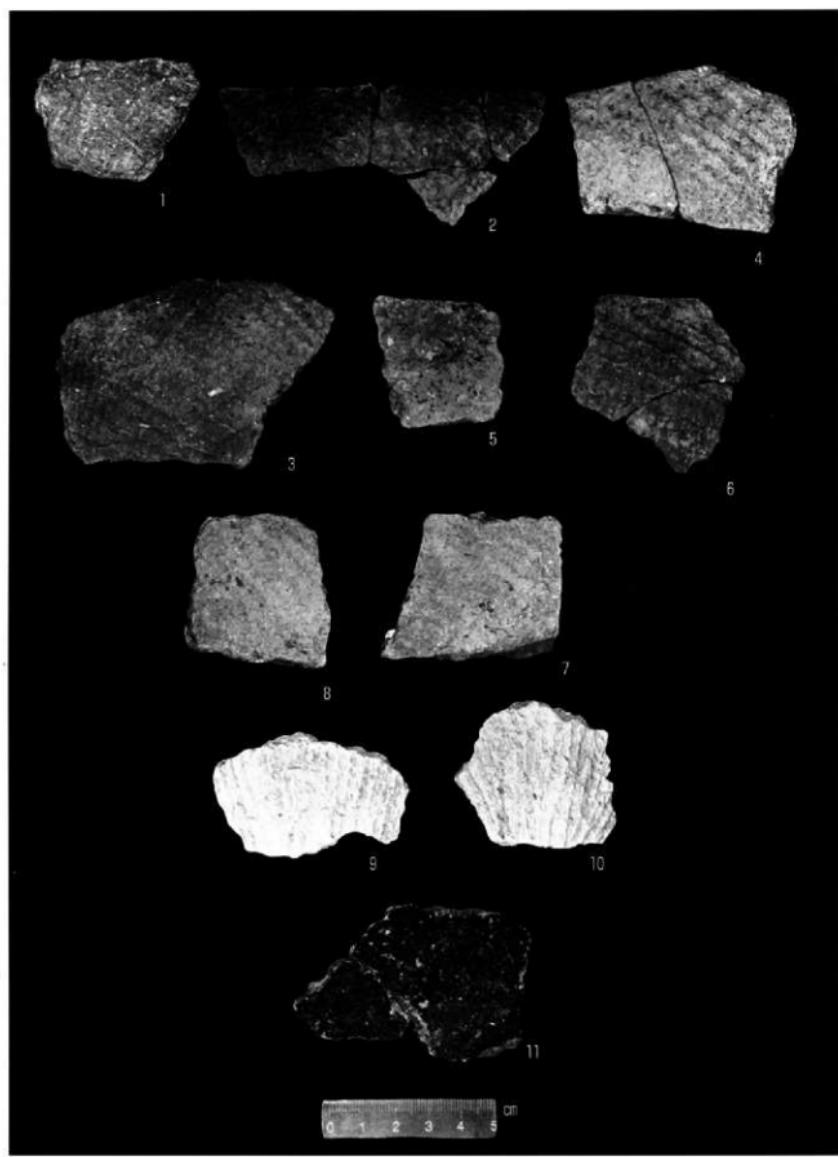


▲ Eトレンチ石器出土状況（北東から）



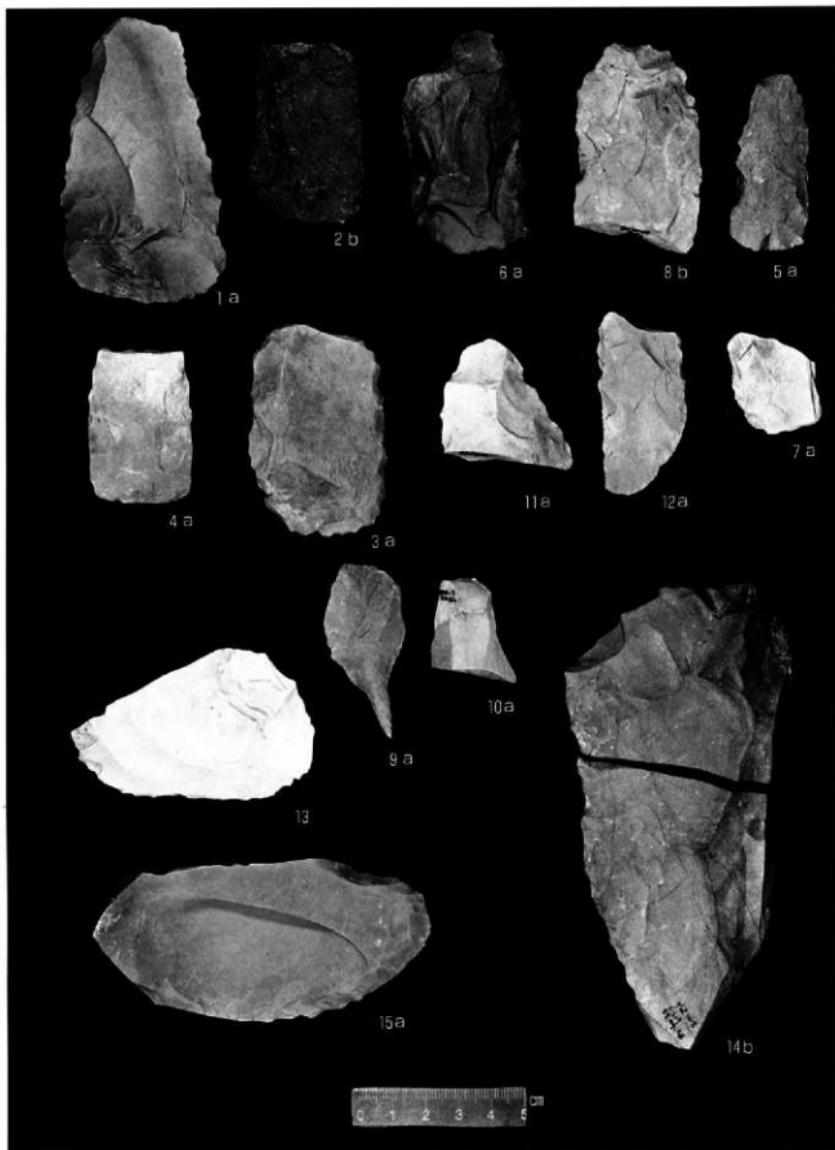
▲ Eトレンチ石核出土状況（北東から）

図版十七 鎌之沢遺跡の調査



出土土器

図版十八
駒之沢遺跡の調査



出土石器



▲ 古志田東遺跡A・B調査区（空中写真）



▲ 古志田東遺跡B調査区

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第69集
遺跡詳細分布調査報告書
第13集

平成12年3月29日印刷
平成12年3月31日発行

発行 米沢市教育委員会
米沢市金池三丁目1-55
TEL (0238) 22-5111
(内線 7502)

印刷 株式会社羽陽印刷
米沢市中央三丁目9-22
TEL (0238) 23-0467
FAX (0238) 23-0480